
零崎轟識の幻想殴打

蒼影

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

零崎轟識の幻想殴打

【Nコード】

N2524U

【作者名】

蒼影

【あらすじ】

本来の歴史には存在しない一人の『零崎』が幻想郷に迷い込む話

第1打・森と金髪幼女（前書き）

どうしても人間シリーズと東方のコラボが描きたかったんです

なのでついやってしまいました

残酷な表現が多くなると思うので気を付けてください

第1打・森と金髪幼女

『零崎』という言葉、あるいは名前を知っているだろうか？

とある物語での裏社会で有名な戦闘集団の総称、『殺し名』の一つ。

血の繋がりでではなく、流血で繋がる殺人集団。

家族に仇なすモノは老若男女人間動物植物一切合切関係なく皆殺しにする。

この物語は本来は存在しない…とあるひとりの『零崎』の物語

零

零

零

零

零

「どどこだどここ？」

男が発した第一声はこの一言だった。

白…というよりくすんだ灰色の様な色の髪、ややつり目な感じの顔。服装は裾が擦り切れた黒のジーンズにグレーのインナーシャツ。その上に羽織っているのは腕の部分に白のラインが入ったジャケット、方には濃い青のショルダーバッグが下げたてある

一見都会の繁華街などにもいるような男であるが、服も顔も少し汚れている

まるで、『しばらく家に帰っていないような』感じが見て取れる

男はぐるりとまわりを見た。前、森。後ろ、森。右、森。左、森。上、空。下、地面。

見事なまでに森一色である。目に良さそうだ。

「辺り一面森かよ……」

男は独りごちる。

そりゃそうだ。今まで男は食糧を買いに本人曰く滅多に来ない町まで行って食糧をけけなしの金で買い、それをバックに入れて意気揚々と『今』の住処へ戻ろうとした時、急な突風に目を閉じ、風が止んで目を開けたら森一色だったのだから

「とりあえず、森から出るか、さっさと帰って寝たいぜ……」

男がそう言ってくるりと後ろを向くと……

「あなたは食べてもいい人類？」

ものすごく物騒なセリフを言う金髪の少女（背丈を考えて幼女というべきか…）が見た目相応のにこやかな笑顔で男に聞いてきた

「…まあ、言いたいことは多々あるが…とりあえずお互い自己紹介と行かないか？」

「自己紹介？」

金髪の少女は首を傾げて男に聞き返す。

仕草はとても愛くるしいが先ほどのセルフを聞いた後だとシニールさを感じる

「そう、自己紹介だ。俺の名前は八重剛毅^{やえしつぎ}。君の名前はなんていうんだ？」

「私？私の名前はね、ルーミア！」

剛毅と名乗った男に促され、ルーミアと名乗った少女は元気よく答えた

「ねえねえゴウキ！あなたは食べてもいい人類？」

剛毅は思った。ここら辺には食人文化カニバリズムでもあるのか？と…

「ちなみにお嬢ちゃん、この辺では人を食べるのは普通なのか？」

「んー？人間を食べるのは妖怪だけだよ？」

ルーミアは考えるような仕草をしたものの、ほぼ即答で答えた

この時剛毅は引っかかるものを感じた

『ヨウカイ』という単語だ

ルーミアの言う『ヨウカイ』は鬼、天狗が有名なあの『妖怪』を指すのだろう……

しかしなぜここで妖怪という単語が出てきたのだろう…

『科学』という文明の利器が広がり、『妖怪』や『幽霊』、『神様』という存在が幻想となってきたこの日本で…

ここで剛毅は『あること』が疑問として頭に浮かんだ

それは…『どうして今までここが『日本』だと思っていた?』という
ことである

非現実ではあるが考えればすぐに思い至ったであろう

剛毅がこの森一色な場所の直前にいたのは都会の外れの『山へ続く
一本道』だ

当然、前後左右に森なんて存在しなかった

なのに今はどうだ森のど真ん中という表現がこれほど似合う場所
はないところにいるのだ

そして目の前には日本では常識的にはありえない『食人文化』を持
っているかもしれない金髪の幼女……

剛毅は一つの答えに行き着いた

その答えは非現実的で夢物語の様で二流小説の様な設定だった

『もしかしたら自分は日本ではない違う場所に来てしまったのでは
ないか?』と

「とりあえずお嬢ちゃん、つかぬ事を聞きくが、ここはどこだ?」

「ここ？ここは『幻想郷』だよ？ゴウキって外から来たの？」

「『外』というのがどこを指すのかはいまいちわからないが、少なくとも『幻想郷』人間じゃないな…」

「じゃあ食べてもいい人類!？」

「違う」

剛毅は額に手を当ててふうと小さく溜息をつくと肩にかけていたバツクから何かを取り出した

「ほら、これでも食べえ」

「なあに、これ？」

ルーミアは剛毅から受け取ったそれをしげしげと見る

「チョコレート。甘くてうまい」

剛毅がルーミアにそう言って聞かせるとルーミアは知ってか知らず

か包みを破り、中身のチョコを食べ始めた

「おいしいね！これ」

どうやらルーミアはチョコに満足しているようだ

「お嬢ちゃん、幻想郷には人は住んでいるのか？」

「住んでるよ〜もぐもぐ…あっちへ行けば人間の住んでる里だよ〜」

ルーミアはチョコを食べながら森の一角を指差した

どうやらその方向に人の住む町やら村やら集落があるわけだと剛毅は思った

「助かったよ…それじゃあな、ルーミアの嬢ちゃん」

「じゃあね〜」

ルーミアと挨拶を済ませた剛毅は人が住んでいるであろうルーミアの指した方向へと歩いて行った

第1打・森と金髪幼女（後書き）

どうでしたか？

感想待っています

第2打・幻想郷で零崎開始（前書き）

2話目ですごいぞ

第2打・幻想郷で零崎開始

男は歩く。

歩く。

歩く歩く。

歩く歩く歩く。

歩く歩く歩く歩く。

歩く歩く歩く歩く歩く。

歩く歩く歩く歩く歩く歩く。

「いつになったら人に会えるんだ？」

不意に男…八重剛毅やえ しつねが呟いた

それもそのはずである……金髪幼女ことルーミアに人の住んでいる方向を教えてもらい、意気揚々と歩いていったのだが…

前後左右森しかなないという状況が続いたため方向感覚が狂い、彼は迷ってしまったのだ。

しかし彼の目には同じ景色が続いているので、彼はまっすぐ歩いて

いると思っっている

彷徨っている内に空は赤く染まり始め、太陽は地平線の彼方へ沈み
そうだった

「本当に人住んでるのかあ…そろそろ疑わしくなって…ん？」

剛毅が一人文句を垂れていると目の前に小さな少女（この子も年齢
的、身長的に幼女といふべきなのだろう）が小さな籠を持って地面
をキョロキョロと見ていた

「譲ちゃん、何してるんだ？もう日が暮れちまうぞ？」

剛毅はその少女に声をかけた。何をしているのかも気にはなったが、
本音はこの子に村までの道案内をしてもらおうと思ったからである

少女は急に声をかけられたからかビクツとしていたが、剛毅の質問
に答えた

「えっとね、おかあさんが風邪をひいてね、慧音せんせいが前にこ
の薬草が風邪にきくって言ってたからとりに来てたの」

なんともいい話である

見ると少女の持っていた籠には剛毅に見せた薬草が一杯とまでは言わないものの、母親に煎じて飲ませる分には十分な量が入っていた

「それは偉いな、それだけあれば君のお母さんも大丈夫だろう…しかしもう日が暮れる、お母さんの所に戻らなくていいのか？」

「うん、今から帰るの！夜に里の外にいと妖怪に食べられるって慧音せんせい言ってた！『オジチャン』も帰るの？」

最後の一言に剛毅は傷ついた

子供なので、ある程度年齢が離れている男をオジジャンと呼ぶのは不自然ではない

しかし、剛毅もまだ20代…分かっていてもそのワードは心に来るのだ

「まあ…そんな感じだ、一人で戻るのも危ないだろう、二人でさっさと戻ろう」

傍から見れば年端もいかない少女を連れていこうとする青年だがそんなことを言っている余裕は現時刻をもってなくなった

剛毅の背後でバキバキと枝が折れるような音がした

「ひっ!?!」

少女が先に気付いき、剛毅にしがみつく

剛毅もそれに気づき背後を見た

見た目は一言でいえば絵本でよく見る鬼だった…

体の色は赤でも青もない黒に近い色だが間違いなく鬼だった

「おいおい…ルーミアの話、本当だったのかよ……」

剛毅は少女を抱えて鬼と距離を取り、木の陰に隠れた

少女は恐怖ゆえか震えっぱなしだが…

「さーてどうすっかなあ……いきなりこの展開だからな……まったく、
退屈しねえなあ」

剛毅は薄ら笑いを浮かべていた

剛毅は少女を見て言った

「讓ちゃん、ちょっと頼みごと聞いてくれないか？」

「え？なに？」

少女は目を丸くしていた

すぐそこに凶暴な妖怪がいるのに目の前の男の人は全く動じないからである

「讓ちゃんは自分の住んでいるところまで一生懸命走って行って大
人の人を呼んできてくれ、できれば大勢がいいな…出来るか？」

「オジチャンはどうするの？」

「あの鬼と鬼ごっこだ」

一言。剛毅はそういった、鬼と鬼ごっこ…自殺志願もいい所である
…ごっこでの自殺志願は『マインドトレンデル自殺志願』ではないので悪しからず…

「オジチャン！！」

「ほれ、早く行きなつて」

剛毅に促され少女は里に向かってまっしぐらに走って行った

鬼は少女に襲いかかろうとするが、その瞬間、顔に人の握り拳程の大きさの石が当たった

「おいおい、ここに遊び相手がいるだろう?」

「キサマ、ニンゲンノブンザイデ…」

鬼が恨みがましく剛毅を睨みながら声を上げる…喋り方からみてあまり知能は高くなさそうだが…

「人間だろうがなんだろうがどうでもいいだろう?鬼は鬼同士、楽しく殺ろうぜ?」

「オニダト?」

鬼は聞き返す。確かに鬼から見れば鬼はこの場に自分一人しか存在しない

しかし剛毅から見ればここには『二人』鬼がいるのだ

「ああ、鬼さ、『殺人鬼』という名の鬼だな……人識の坊主じゃねえが傑作だな…キシシ…」

そう笑いながら剛毅はバックから何かを取りだした

それは手甲だった鉛色に鈍く輝き、無骨ながらどこか美しさを感じる品だった

剛毅はそれを両の手に嵌め、ジャケットのポケットから煙草を一本取り出して火を付けず口にくわえた

「ニンゲン、ナニモノダ？」

「俺？俺の名前は零崎轟識（せいきしゅうせき）、世間一般…いや、裏の世間一般では『抹消欠陥』（ハニッシュユブレイク）なんて呼ばれてるしがない殺人鬼さ…さてと…」

剛毅…零崎轟識は一拍置いて

「んじゃまあ、久々に零崎を始つか……」

三日月のような笑みを浮かべ、目の瞳孔は開ききっていた轟識がそう言っつて鬼へと突っ込んだ

ここ幻想郷で零崎が開始された…

零

零

零

零

零

所変わって幻想郷人里

今ここでは一人の少女の大搜索が行われていた

母への薬草を取りに行くとき森へ行ったときり帰って来ないのだ

里の守護者を務める上白沢慧音は少女ことを案じながら必死に搜索を行っていた

焦りが募る、不安が募る里の守護者として顔に出さないようにしているがやはり心配で取り乱しそうだった

「慧音様！」

その時村人の一人が慧音のもとにかけてきた

「どうしました！」

「あの子が今森から！」

その言葉を聞いて慧音は走った

走った先には森の中を走ったからか、体のあちこちに小さな傷を作った少女が立っていた

「こんな時間までどこに…」

慧音がそう言いかけた時、少女は目に涙を溢れさせて

「せんせい！はやく！オジチャンをたすけて！！」

少女の必死の叫ぶに慧音たち里の人は事情を聴いた

事情を聴いた慧音たちをすぐに剛毅を助けるため各々武器を持って少女の案内の元、森へと向かっていった

零

零

零

零

零

場所は再び森の中

慧音達が少女に案内されその場につくと一人の男がいた

森の中では男：零崎轟識が煙草を吸いながら『あるもの』に腰掛け、空を見ていた

『あるもの』は周りが暗いせいで見ようによっては岩に腰掛けているように見える

「ふう…：本当に妖怪がいるとは…吃驚仰天とはこの事なんだろうな…」

轟識は慧音達に気付いておらず唯々、空を見上げながら一人呟く

「オジチャン！」

少女が轟識に声をかけた

声に気付いた轟識がそちらに顔を向ける

「ああ、嬢ちゃんか、大人の人を呼んできてくれたみたいだな…関心関心、ずいぶん早かったね？」

「オジチャン、大丈夫なの？」

少女は轟識に気遣いの言葉をかける、轟識は煙草の火を消して少女のほうに向き直った

「ああ、この通りだ…しかし、鬼ごっこなんて慣れないものしょうなんて考えるものじゃないな…スッキリ取っ組み合いの喧嘩になっちまった…それに…」

轟識は自分の腰掛けているものを一瞥し、こう言った

「案外妖怪つてすぐに死んじゃうんだな…」

轟識がそう言ったのと同時に雲の切れ間から月の明かりが差し、轟識を照らした

慧音達は絶句した

轟識が腰かけていたのは鬼だった…

いや、『鬼の死体』が正しい表現だろう…

足は折れ、腕は千切れ飛び、腹に穴が空き、顔の半分が消し飛んでいるが辛うじて原型は残っているので死体と判断できる

もう少し損傷が激しかったら『鬼の死体』ではなく、『鬼だったモノ』と表現を変えねばならなかっただろう…

轟識のほうをよく見ると両手にはべっとり血がこびり付き、顔にも少し返り血が浮いていた

しかし、轟識は『無傷』だった…

「君は一体…？」

いち早く現実に石を戻した慧音が轟識に問いかける

轟識はいつも通り…轟識にとってはいつも通り若干気だるそうに慧音に言った

「とりあえず、お前さんたちが住んでる里とやらに案内してくれな
いか？ここだとまたこいつみたいな妖怪が出てきそうだし…」

「あ、ああ…わかった」

流されるように慧音は轟識を里へ案内した

こうして零崎轟識の幻想郷でも最初の零崎は幕を下ろした

(零崎轟識…名もない鬼に対し、零崎を開始)

(名もない鬼…零崎轟識により死亡)

第2打・幻想郷で零崎開始（後書き）

いかがだったでしょうか？

感想待っています

零崎轟識の設定（前書き）

設定載せるの忘れてた

新しい情報が本編で出るたび更新します

注：ここに書いてある人間関係は私のオリジナルです。この先使うかも決めてません

零崎轟識の設定

・設定

名前：八重やえ 剛毅こうき

本名：零崎ぜろさき 轟識こうしき

二つ名：抹消欠陥ハニッシュユブレイク 破城終デッドプリンガー 兄弟狂愛マッドブラザー 零崎の小食家

武器：武器は鉛色の肘まで覆う手甲ハニッシュユブレイク

服装：裾が擦り切れたジーンズにグレーのインナー、腕の部分に白のラインが入ったジャケット

顔：くすんだ灰色の髪につり目：知り合い曰く「釣り目だけど普通の顔」

口癖：「んじゃまあ…零崎を始つか…」

簡易紹介：本来とは違う歴史の零崎一賊の一人本来の歴史とは違い

『零崎双識』 『零崎軋識』 『零崎曲識』 3人と轟識で『零崎4天王』
と呼ばれる。

零崎一賊の中で一番二つ名が多いらしい…

零崎轟識は女の姉妹は殺さない

零崎一賊の中で一番殺人衝動が低く、最低月に一人、二人殺せれば
満足のこと（大量殺人が嫌いなわけではない）故に 零崎の小食家
と呼ばれるようになった

零崎一賊の中で一際家族意識が強い。

人間関係（人間シリーズ）

・ 零崎軋識：お互い「アス」、「レイ」と呼び合う仲

・ 零崎双識：お互い「レン」、「レイ」と呼び合う仲

・ 零崎曲識：結構一緒の場面にいることが多い。お互い「トキ」、
「レイ」と呼び合う仲

・ 零崎人識：結構過保護に接している。人識からは「轟識の兄貴」

第3打・懸音と零崎轟識（前書き）

説明会みたいなものです

それではどうぞ

第3打・慧音と零崎轟識

「今回は里の子を助けていただいております。人里の人間を代表して感謝します。」

「別に構わんよ…あの嬢ちゃんが勝手に助かっただけさ…言葉の通りにね、俺は勝手にあの鬼と殺りあっただけだし…」

幻想郷の人里

人里の守護者を務める彼女：上白沢慧音の自宅に八重剛毅：零崎轟識が胡坐をかいて慧音の正面に座っていた

ちなみに、敵対する意思が無いことを示すためにバックと己の武器である手甲：『バニッシュユブレイク』は慧音の隣に置いてある

「んじゃまあ、ここらでお互いに自己紹介と行くか？」

「そうですね、私は上白沢慧音^{かみしろみわ けいね}。この人里で守護者を勤めている」

「俺は零崎轟識。『抹消欠陥^{バニッシュユブレイク}』なんて二つ名で呼ばれてる殺人鬼だ、ちなみに轟識は相手を殺す時に名乗る名前なんで、普段は八重剛毅と呼んでくれ」

剛毅は煙草をくわえてそう言った。因みに火はついていない

「それじゃあ、自己紹介も終わったし、お互い質問タイムといこうか…お先にどうぞ慧音さん」

「はあ、では…あなたはなぜ幻想郷に？」

「俺も知りたいね、気づいたらここにいたんだ。そしたら食人趣味カニバリズムの金髪幼女に会っし、道に迷っし、鬼に出会っしで俺も結構大変なんだぜ？」

「はあ…そうなんですか…」

「んじゃ、今度はこっちの質問、『幻想郷』について説明を頼む」

「わかりました」

剛毅に言われ慧音は説明を簡単にではあるが語った

『幻想郷』…人々が忘れたモノ、妖精、妖怪、神が流れ着く場所だ
という

人間の住む『外の世界』と『幻想郷』との間には『博麗大結界』というものが存在し、普段は外の世界と幻想郷は行き来することができないそうだ

ほかにも剛毅は慧音から幻想郷についての基本的な知識を聞かされた

「オーケイ…何となくわかった、つまり俺は何かの拍子にここに迷い込んだってのは完全に理解したぜ」

「本当にわかったのか私は心配ですが…では私の番です、あなたは先ほど自分のことを『殺人鬼』と呼んでいましたがそれは本当ですか？」

「本当さ、殺し名序列第三位『零崎一賊』の一人、知っている奴等からは『抹消欠陥』パニッシュユブレイク、『破城終』デッドプリンガー、『兄弟狂愛』マッドブラザー、『零崎の小食家』なんて呼ばれてる」

「『零崎一賊』……？」

「続けて質問かよ…まあいいや、簡単に説明するとだな……」

剛毅の説明で慧音は本日二度目の絶句を味わった

剛毅のいた外の世界は主に4つの世界で構成されている

一般的な人たちが住む幸福もあれば不幸もある『表の世界』

表の世界に一番近く、『赤神』、『謂神』、『氏神』、『絵鏡』、『檻神』^{おりがみ}と言う五つの財閥がトップに君臨している『財力の世界』

『壹外』^{いちがい}、『式栞』^{しきしり}、『参神』^{さんざか}、『肆屍』^{しかばね}、『伍砦』^{ごとりで}、『陸枷』^{ろくかせ}、『捌限』^{はちぎり}、『玖渚』^{くなぎさ}の九つの機関が『玖渚』の統括の元、一つの世界を作っている『政治力の世界』

そして、剛毅：零崎轟識が身を置いていたのは『暴力の世界』

剛毅曰く、異形・異端・異能こそが支配する秩序で無秩序な世界

『暴力の世界』には大きく『殺し名』、『呪い名』という二つの集団が存在する

さらに『殺し名』の中で七つの集団に分かれている

序列第一位『匂宮』^{においのみや}…相手が誰であっても頼まれれば殺す殺し屋の集団

序列第二位『闇口』^{やみぐち} 特定の主の為にだけに殺す暗殺者の集団

序列第三位『零崎』^{ゼロさき} 理由なく殺す殺人鬼の集団

序列第四位『薄野』^{すすきの} 正義の為に殺す始末番の集団

序列第五位『墓森』^{はかもり} 皆の為に殺す虐殺者の集団

序列第六位『天吹』きれいにする為に殺す掃除人の集団

序列第七位『石凧』生きるべきでは無い者を殺す死神の集団

そして、『殺し名』の対極に位置するように『呪い名』にも六つの集団に分かれている

序列第一位『時宮』『勾宮』の対極に位置する恐怖を司る想操術師の集団

序列第二位『罪口』『闇口』の対極に位置する武器商人の集団

序列第三位『奇野』『薄野』の対極に位置する毒を使う病毒遣いの集団

序列第四位『拭森』『墓森』の対極に位置する攻撃されたという自覚を一切与えずに殺す『飼育員』の集団

序列第五位『死吹』『天吹』の対極に位置する身体支配を駆使する『死配人』の集団

序列第六位『咎凧』『石凧』の対極に位置する集団、詳しいことは分からないらしい…

ただ、『零崎』には対極する『呪い名』は存在しないとのこと

さて、少し話がずれてしまったので『零崎』についての説明に戻ろう

『零崎一賊』…この世で最も敵に回すのを忌避される醜悪な軍隊に

して、この世で最も味方に回すのを忌避される最悪な群体。

邪悪と冒涇の宝庫。

理由なく殺す『殺人鬼』

血の繋がりでなく、流血で繋がる殺人集団。

家族に仇なすモノは老若男女人間動物植物一切合切関係なく皆殺しにする。

こんなところかなと剛毅は語った（4つの世界と『零崎』の簡単な説明のみ『殺し名』、『呪い名』の序列や集団の名前などは割愛）

「いいのですか？私にこの話をしてしまって？」

「んーどうだろうな…この場に裏の世界のやつがいたらギリギリ殺されるレベルのことしか話してないな」

「全然駄目じゃないですか!？」

まったくである

「まあいいじゃねえか、じゃ、俺からの質問。俺は元の場所に帰れるのか？」

「それは明日霊夢に相談だな」

「霊夢？」

「博麗霊夢、博麗神社の巫女さ」

「そいつが俺を外の世界に帰してくれると？」

「そういうことになるな」

「なるほどね…」

「私からの最後の質問だ。『君はこの里の人間を殺すのか？』」

慧音がそう聞くのと同時に慧音から急に力の気配が膨れ上がる

所謂、臨戦態勢といわれる状態だ

対する剛毅は飄々とした顔で答えた

「今のところはないな…」

「何？」

慧音は顔を顰める

それはそうだ、『理由なく殺す殺人鬼』が人を殺す気がないというのだから…

「ついさっき鬼を殺したからな…あと一月は殺しをやらなくても俺はいいだろう言っただろ？『零崎の小食家』だと、俺は月に一人か二人殺せれば満足なのさ」

「信用できないな…」

「どうせ俺は明日帰れるかもしれないんだ、気にするなよ」

「しかし…」

「ほれ、さっさと寝るぞ…」

そう言って剛毅は壁を背に座ったまま眠ってしまった

「本当に寝てしまった……はぁ……疲れた、私も寝よう」

慧音も剛毅とは反対の場所で眠りに就いた

しかし、殺人鬼と同じ部屋で寝るなんてなかなかタフである

こうして零崎轟識の幻想郷での一日は幕を下ろした

第3打・懸音と零崎轟識（後書き）

どうだったのでしょうか？

感想待っています

第4打・零崎轟識と八雲紫（前書き）

前回のあらすじ

自己紹介は大事です

注釈・剛毅は警戒している相手には『お前さん』『お嬢さん』『お嬢ちゃん』

警戒の必要がない相手には『お前さん』『お嬢さん』『お嬢ちゃん』『お前さん』

年下には『お嬢ちゃん』『坊主』と呼びます

第4打・零崎轟識と八雲紫

零崎轟識が幻想郷に着いた日の翌日、轟識こと剛毅は慧音に連れられて

博麗神社の階段を上っていた剛毅と慧音

「偶に階段が長い神社や寺の話は聞くがこれは長すぎだろう……参拝する奴居んのか？」

「文句を言つな八重、もうすぐだから……」

「その台詞、五分前にも聞いたぞ……」

「お前が五分おきに同じようなセリフを言うからだ」

と実にくだらな会話が続り広げられていた

「ついでに、八重」

「やっとか……一月分ぐらい階段登った気分だ……俺は唯でさえレンの奴に肉つけるとか言われてるのに肉つける前にガリガリになっちま

う…」

「あら、女の子はお肉を付けないようにするのに努力するのに喧嘩売ってるようにしか見えないわね…」

剛毅の呟くように一人の少女が剛毅に声をかけた

「誰だ？お前さんは」

剛毅の呟きに答えたのは巫女だった

なぜか腋が露出したデザインの巫女服の巫女だったが…

そして手には竹箒、どうやら掃除中のようにだったようだ

「人の名前を聞く時は自分から名乗るものよ？」

巫女は掃除の手を止め、剛毅に向き直った

「そりゃそうか…悪いな、俺は八重剛毅。お前さんは？」

「はくれい博麗れいむ霊夢。この博麗神社の巫女よ」

「お前さんが？ふーん…」

剛毅は霊夢をじっと見る

「なによ？」

「いや、俺が勝手に博麗の巫女さんはもうちょい年食ってるのかトキの条件に当てはまるくらい幼いのかどっちかだと思ってただけだ」

「失礼な人ね…」

「そついう性分だ」

「で、上白沢の姉ちゃん曰くお前さんが俺を外の世界に戻してくれるらしいな？」

剛毅は霊夢から視線を外さず聞いた

「ああ、その事なんだけどね、あんた、元の場所に戻れないらしいのよ」

霊夢は剛毅の元世界に戻れるかもしれない希望をあっさりバツサリ切り捨てた

「「……はあ？」」

剛毅と慧音の声が重なる

「「どういふことなんだ霊夢！？八重を元の世界に戻すことができないなんて！」」

「まったくだ、おいお譲ちゃん、どういふことだ？」

「それは…「それは私がお答えしますわ、異なる世界の殺人鬼さん」「…だってよ？」」

突然霊夢の隣に次元の裂け目のような空間が開いて、そこから日傘をさした金髪の女性が現れた

「流石幻想郷と言っべきか…初めましてだお嬢さん、俺は八重剛毅、お前さんの名前は？」

「私の時とは対応が違うわね……」

「お前の時のを教訓にしたんだよ……このお嬢さんは譲ちゃんより一癖も二癖もありそうなんでな……」

「あらひどい……」

その女性は手に持った扇子で口元を隠しコロコロと笑った

「胡散臭さは人識の坊主が言っていた『戯言遣い』並みだ……」

剛毅は前に血の繋がらない弟から聞いた本名不詳の戯言遣いのことを思い出した

「その戯言遣いってのが誰かは知らないけど、あなた、初対面の人物物に対して結構遠慮しないのね？」

「そういう性分だからな、さっきも言ったか……それで、お嬢さん、理由を聞かせてもらおうか？」

「お嬢さんなんて他人行儀ね、私は八雲紫やくも ゆかりよ宜しくね？」

「おう、宜しくさん…で、理由は？俺はあまり気が長いほうじゃないんで、単刀直入に結論で頼む」

剛毅は若干うんざりした様子で紫に聞いた

「せっかちなね、じゃあ結論から。あなたのいた世界が『私が知っている外の世界』とは違う世界の住人だからよ」

紫の言葉に一同は驚いた

「どういうことなんだ？それじゃ外の世界は昨日八重が言っていた世界じゃないのか？」

「昨日の話？どうな話をしたの、慧音」

霊夢に聞かれ慧音は渋るような顔をした

チラッと剛毅をみる

「別に昨日言ったことは話してもいいぞ？」

裏の世界とかの秘密なんて剛毅にはあまり関係ないようだ

それでいいのか？零崎轟識…

「そうか、わかった」

慧音は霊夢たちに昨日剛毅から聞いた話を聞かせた

霊夢たちは話を聞いて驚いていたいや、正確には霊夢一人だけだが…八雲紫は顔色一つ変えなかった

「さて、説明も終わったことだし紫さんよお、違う世界だとあれか？私には幻想郷と外の世界を行き来できる力があるけど、異世界にはいけません』ってやつか？」

「御明察よ零崎轟識さん」

「じゃあなぜ俺はこの幻想郷に来た？」

「偶にあるのよねえ…異なる世界のものが幻想郷に紛れ込むのは…生きてる人が紛れ込むのはあなたが始めてよ？」

「生きてここに来たことを喜んでいいのか、運悪くここに来たことを悲しめばいいのかどっちのリアクションをとればいいと思う?」

「どちらでも良いんじゃないかしら?」

「ところで人は俺が始めてだとしても…モノってなんだ?」

「じんなのよ」

そついうと紫は再び空間を開き、中から『あるもの』を取り出した

「おいおい…なんで『それ』あるんだ?そいつは壊れたはずだぞ?」

「あらそつなの?」

「目の前で見ただからはつきり覚えてる…間違いなくこれはあの時壊れたアスの『シムレスパイアス愚神礼賛』だ」

それは釘バットのようなものだった

なぜ『ような』と言ったのは普通釘バットは木製のバットに釘を打ち込んで作られるがこれは違う

『愚神礼賛』は釘もバットもすべて鉛でできているからだ

もちろん、鉛のバットに釘など打ち込めることなどできない

これは鉛を釘バットの形に鑄造した棍棒だと言ったほうが表現に近い

持主は零崎一賊史上、最も荒々しく、最も容赦のない手口で、最も
数多くの人を殺し、最も長生きをした殺人鬼『シームレスパイアス愚神礼賛』こと零崎
きししき軋識

「ま、これが何なのかはどうでも良いことなのよね……」

そう言って紫は剛毅に愚神礼賛を手渡した

「良いのか？」

「良いも何も私はいらぬもの……」

何か裏があるのではないかと訝しげな表情を浮かべる剛毅だがそれでも紫から愚神礼賛を受け取った

「んじゃ有難くもらっとくわ」

「ところで八重、お前これからどうするんだ？」

愚神礼賛を受け取った剛毅に慧音が声をかけた

「どう、とは？」

「幻想郷で生きていくのだろうか？当てはあるのか？」

「それはこれから考えるさ…。」

そう言って剛毅は振り返って神社から見える幻想郷を見ながら言った

こうして、零崎轟識の幻想郷永住が決定した

第4打・零崎轟識と八雲紫（後書き）

いかがだったでしょうか？

ちなみに剛毅が幻想入りしたのは時系列的に人間シリーズの『零崎曲識の人間人間』の『ラストフルラストの本懐』の後、戯言シリーズの『ネコソギラジカル』の前になります

一応、『想影真心』と戦ったことはあるということですよ

第5打・零崎轟識のこれから（前書き）

前回のあらすじ

轟識はゆかりんから釘バットをゲットした

第5打・零崎轟識のこれから

博麗神社から再びあの長い階段を下りた辺りで慧音が剛毅に声をかけてきた

「なあ、八重、これからどうするんだ？」

「さつきも言ったが何とかなるさ、とりあえず今最も急務なのは寝床の確保だろうな…慧音の姉ちゃんも俺のような殺人鬼と一緒にはきついでらう？」

「そんなことは…」

「ま、里の村長辺りに借り家がないか聞くか…贅沢は言ってられないしな、雨風凌げるならあばら家でもいいし」

剛毅は普段からあっちへフラフラ、こっちへフラフラの放浪生活が長いので雨風させ凌げればよいなどかなり住む場所についての望みが低い

「よし、八重！私の家に住め！」

「……………はあ？」

これまで結構いろいろな体験をしてきた轟識だがさすがに殺人鬼と知った自分に『一緒に住め』と言われたことは当然ながら無いので当然こんな反応である

「…一応理由を聞いてもいいか？」

「殺人鬼のお前を一人にできるわけがないだろう！」

「俺男、お前さん女。これについては？」

「八重は私にそんな邪な感情を持っていたのか？」

「……………持っていないなあ……………」

「なら大丈夫じゃないか！」

剛毅は頭を悩ませていた。はっきり言って剛毅自身一人で生活するほうが気楽で過ごしやすい、殺しも月一で十分。しかも人じゃなくてもここ幻想郷には人間より殺し甲斐のある妖怪がいるのだ…

故に慧音との同居を拒否しようとするがすべて慧音に却下されてしまった

ついに……

「はあ……わかったよ、世話になるよ……まったく、どうして俺の周りには押しの強いというか私の強い女しかいないのかねえ……『人類最強』といい、積希といい、目の前の女といい……」

剛毅は折れ、慧音の提案を受け入れた。

慧音の家に行く間、何かブツブツと呟いていたがそれはどうでも良いことである

零

零

零

零

零

「さて、これで君の住居問題は解決されたわけだが、仕事はするのか？」

家について開口一番、慧音はこう言った

「当然だ、ヒモは勘弁だ。それに、仕事については考えがある」

自信満々の剛毅である

「ほう？何をするつもりなんだ？殺し屋か？ヤクザか？」

「考えが物騒だなオイ…俺がやるのは『何でも屋』だ」

「何でも屋？」

「そう、頼まれればなんでも引き受ける店だ。殺し屋家業なんて『
匂宮』にでもやらせとけ」

「何でも…それは殺しもか？」

慧音の目が細くなる

「頼まれて俺が納得したらな？前に俺の世界でもやってた仕事だし……で、慧音の姉ちゃんには頼みがあるんだが……」

「なんだ？」

「その何でも屋の事務所として家を一軒借りたい。お前さんから村長に口添えできないか？」

慧音は顎に手を添え、思案顔になる

おそらく彼女の頭の中で彼に仕事の事務所とはいえ一軒家を与えていいのとかそういうのがグルグルと渦巻いているのだろう……そして……

「わかった、明日、聞いてみよう」

「それはありがたい。んじゃ、飯にするか、いい時間だし……」

そう言って剛毅は立ち上がり、台所に向かった

「八重が作るのか？というか作れるのか？」

「失礼だな、お前さんは…まあ殺人鬼が料理できんのは不自然か…俺の知り合いにやたらと注文の多い女がいてな…」

「注文の多い女？」

「ああ、罪口積^{つみぐち}希^{つみぎ}って言うんだけどな…そいつ曰く『殺人鬼といえど料理ができないなんてダメ男もいいところですよ』と言って俺に料理を覚えさせやがった…他にも『私の寿命が減ると困るので私の前で煙草を吸わないでください。ついでに他の女の人や子供の前でも吸わないでください』とか言ってきてな、最初は無視してたんだが無視するとずっとギャーギャー煩いから仕方なく辞めたんだよ」

「すごい女性だなそれは…」

慧音も顔が引き攣っている

「しかし何でも屋か…」

昼食を待つ間座って待っていた慧音がポツリと呟く

「まあ、おそらく依頼の大半は失せもの探しかそんなもんだろう…」

剛毅も料理の手を止めず、慧音の呟きに返事をする

「では、依頼の第一号として私から依頼をしていいか？」

「あん？なんだ？」

「私が教えている寺子屋の手伝いと里を襲う妖怪退治をお願いしたい」

慧音は正座をし、剛毅をじっと見てそう言った

「寺子屋ねえ…俺はものを教えるのは苦手だぞ？それでも良いなら他の依頼がない時にたまに手伝うとしよう。後者については俺から言おうかと思っていた」

剛毅はこの後慧音が里の村長に後者の依頼を引き出させ引き受けるつもりだった

里の人間を殺せば慧音や霊夢たちが黙っていないだろう…それを直感で感じた剛毅は里を襲う妖怪退治を引き受けようと考えた

里を襲う妖怪なら殺しても文句はないだろうし、剛毅自身も自分の殺人衝動の解消にもなって一石二鳥であると…

「ありがたい、最近『スペルカードルール』のおかげで被害は減ってはいたんだが、それでも完全になくなったわけではなかったからな…」

「『スペルカードルール』？」

知らない単語に剛毅は反復するように聞き返す

「ああ、知らなかったのだな、これは私が悪いな…スペルカードルールというのは…」

慧音の解説を簡単に話すと、スペルカードルールは幻想郷内の争い事や妖怪同士の戦いに必要以上の力を出さないようにするための決闘方法だという

『スペルカード』という意味のある技を込めたカードをお互い決めた回数分持ちお互いの弾幕を攻略しあうものらしい…

「わかったか？」

「一応……できたか」

昼食が出来上がったのでそれ持って剛毅は慧音のもとに向かう

「ほう、なかなか美味しそうだな」

「信じていなかったのか？」

「信じられると思うか？」

「そりゃそつだ…」

お互いにそう言って昼食を食べようとしたとき…

「どうも！清く正しい射名丸文です！」

騒がしい客がやってきた

第5打・零崎轟識のこれから（後書き）

いかがだったでしょうか？

ちなみに轟識は『人類最強』と個人的な面識があります

あと、名前だけチラッとオリキャラでました。

感想待ってます

第6打・零崎轟識と射名丸文（前書き）

前回までのあらすじ

剛毅の住居は慧音の家

第6打・零崎轟識と射名丸文

「…おい、上白沢の姉ちゃんよ、この昼飯時に人様の家に吶喊してくるこいつは誰だ?」

八重剛毅はうんざりした様な顔で同じく困った顔をしている上白沢慧音に声をかける

「この方は射名丸文しゃめいまる あや、見た目の通り天狗ですよ。確か、文屋をやっているはずだ…」

「文屋?つてえと新聞記者か…?その新聞記者が何の用なんだ?」

剛毅が文に目を向けて言う

シヨートの黒髪に赤の瞳、頭にはちょこんと小さな山伏風の帽子が乗っかっている。そして背中から烏のような真っ黒な羽が生えていた肩にはカメラがぶら下がって左手には手帖を持っている

「それはもちろん、取材ですよ!」

びしっと剛毅を指さしてそういった

「飯を食ってからだ。待ってる」

「そうだな、待っていてくれますか？」

「そうですね、さすがにお食事を邪魔してまで取材しようとは思いません。どうぞ、ごゆっくり」

文の言葉を聞いた二人はとりあえず食事を開始した

零

零

零

零

零

「さて、食事も終わったし、食器は上白沢の姉ちゃんがやってくれ
るみたいだし……さっさと取材とやらを始めてくれ、俺はこれから仕
事で使う家の交渉や村長への挨拶なんかがあるんでな……」

ちなみに、片付けも剛毅がやるはずだったのだが慧音が「片付けく
らい、私がやる」と言ってお箸を持ってさっさと行ってしまった

「そうですね…じゃあ質問いきます」

「おう」

「あなたの名前は何ですか？」

「八重剛毅、もうひとつ零崎轟識という名もあるが剛毅のほうで呼
んでくれ」

「わかりました、次の質問です…なぜ幻想郷に？」

「知らん。気付いたらここにいた」

「はあ…そうですね…では次の質問です、能力は何ですか？」

「能力？なんだそれ？『人類最強』みたいにビル40階から飛び降
りても無傷だったり、ショットガンを腹に零距离で食らっても腹筋

ですべて防いだとかそういうのか？あいにく、俺はそういうのは持つてないぞ？」

「いや、そんな化け物じみたものではなく…誰ですか『人類最強』つて…おかしいですね…さっきそこでスキマ妖怪が「守護者の家にいる外来人は能力を持っている」つて言っていたので…てつきり」

「何考えてんだ？あのお姉ちゃんは…」

「何つて言い忘れていただけよ」

剛毅がつぶやくと『ヌツ』つという効果音がつきそうな勢いで剛毅の隣にスキマから上半身だけ出した八雲紫がいた

「あやや…相変わらず急に現れますね」

「いいじゃない、困るわけでもないし…」

紫は相変わらずコロコロと笑っている

「それで、八雲の姉ちゃんよ…俺の能力って何だ？そもそも能力つてなんだ？」

「幻想郷の住人が持つてる能力のことよと言っても人間では能力を持つてるのは少ないわね…私の能力は『境界を操る程度の能力』よ…」

「ほう…面白いな…」

「でしよう？で、あなたの能力はズバリ、『奪う・捨てる・捨てる程度の能力』よ」

「？…どうい能力なんですか？」

久々に文が口を開いた

「文字通りの能力だと思っわよ…試してみましよう…」

紫はそついと掌を剛毅に向けて一発弾幕を放った

「げ！？」

剛毅は驚く、そして弾幕が剛毅にあたる瞬間

弾幕はピタリと『動きを止めた』のだ

「あれ？」

「どついうことだ？」

「簡単よ」

全身をスキマから出した紫が説明する

「貴方は無意識に私の弾幕の『支配権』を『奪った』のよ…」

「はあ…無意識とはいえ凄そうな能力ですね…」

「慣れれば意識してできるようになると思っわ、他の『捨てる』『捨つ』も同様にね。それじゃ」

そついうと紫はスキマを開いて消えてしまった

「勝手にやってきて勝手に帰りやがった…」

「まあ八雲さんですし…次の質問いきます!」

「わかった」

その後、剛毅は文に好物、特技、趣味、などなど根掘り葉掘り聞かれた（裏の世界については慧音と同様、触りだけ）

「なるほど、わかりました。しかし…殺人鬼ですか…これはさすがに新聞に載せられませんね…」

「乗せても載せなくてもかまわない。好きにしなよ、射名丸の譲ちゃん」

「文です!」

「わかったって、射名丸の譲ちゃん」

「わかってないじゃないですか!？」

その後取材終えた文は意気揚々と空を飛んで帰って行った

そして剛毅たちは里の村長の家に行き、慧音の依頼と仕事のための家についての交渉を行い、見事一軒家と里の護衛の依頼を引き受けたのだった

後日、文の新聞を読んだ剛毅は苦笑いを浮かべていた

『新たな外来人、八重剛毅に迫る』

先日、新たに幻想郷に迷いこんだ外来人に突撃取材を行った

何でも彼の話では外の世界では知る人ぞ知る有名人だったそうだが

幻想郷での永住を決めているようで、先日里の一軒家で『何でも屋』を開業したそうです

彼は能力を持っていて能力名は『奪う・捨てる・拾う程度の能力』だそうで、彼はその場に居合わせた八雲ゆかりの弾幕の支配権を奪って見せた

彼は悪い性格の人物ではないので里で声をかけてみるといいでしょう

と書いてあった

いいのか？零崎轟識……

第6打・零崎轟識と射名丸文（後書き）

いかがだったでしょうか？

感想待っています

第7打・零崎轟識と霧雨魔理沙（前書き）

前回までのあらすじ

取材を受けて能力発覚

第7打・零崎轟識と霧雨魔理沙

八重剛毅：零崎轟識が幻想郷に来てすでに二週間が経とうとしていた

里の外れ近くの一軒家を改築した何でも屋『轟トウキョウ』で当の本人、八重剛毅はだれていた

「……………暇だな……………」

応接のために若干苦手意識がある紫に頼んで手に入れたソファに寝転がり剛毅は新聞片手にそう呟いた

今日、今に限って剛毅は暇を持て余していた

普段なら大なり小なり何でも屋としての仕事の依頼があるはずなのだが、今日に限って客は一人も来なかった

ちなみに時刻は日本の時間で大体昼前

「……………本当に暇だ……………」

再び剛毅が呟いたとき、事務所の扉が勢い良く開かれた

「おっす、剛毅！遊びに来たぜ〜！」

扉を開けて入ってきたのは白と黒のエプロンドレスのような服装に
絵本の魔女が被っているような黒いとんがり帽子を被った金髪の少
女：霧雨^{きりさめ}魔理沙^{まりさ}だった

「珍しいな、霧雨の嬢ちゃん。何時もなら森近の兄ちゃんの店にい
るんじゃないのか？」

「いいじゃないか、偶には…それといい加減、魔理沙って呼んで欲
しいんだぜ」

「俺は大抵の相手にはこの呼び方だ。今まで下の名前や二つ名、渾
名で呼んだは10人もいない。それと自然にテーブルの煎餅を食う
な」

剛毅が魔理沙に下の名前で呼ばないことを話しているうちに当の本
人は反対側のソファに座り、煎餅を食べ始めていた

因みに文の『文文。(ぶんぶんまる)新聞』のおかげなのか里にい
る人間や里の人物と友好関係にある妖怪等と既に剛毅は面識を終え
ている

それ故か偶にこの事務所を暇潰しなどで訪れる人間や妖怪がいる

魔理沙は今のところ一週間前に一度この事務所を訪れている

この調子だと一週間に一辺の感覚で来るかもしれないと剛毅は思っていた

「いいじゃんか、それに剛毅だってなんだかんだ言っただけで今お茶用意してるじゃないか……」

魔理沙の前にお茶を置き自分の前にもお茶を置いてソファに座りなおした剛毅に向かって魔理沙は笑いながらそう言った

「お前とそっくりな自由奔放な赤い奴を知っているからな……」

「赤い奴？それって偶に剛毅の話に出てくる『人類最強』って奴のことなのか？」

「そつだ、本名あいかわ哀川潤じゅん、『人類最強』、『赤い征裁』、『死色の真紅』のしんく、『砂漠の鷹』デザート・イーグル、『嵐の前の暴風雨』など数多くの異名を持ち、数々の伝説や武勇伝を持つ頭の前からつま先まで赤い服装で乗り物も赤い色などにかく赤が大好きな人間だ」

「全身真っ赤って凄そうなんだぜ……ん？武勇伝？どんな武勇伝なんだぜ？」

魔理沙は煎餅の滓を口元につけて、お茶をすすりながら目をキラキラさせて剛毅の話聞いている

「曰く、『炎上するビルの40階から飛び降りても無傷だった』曰く、『ショットガンの零距离射撃を腹に食らっても生き残った』曰く、『千人の仙人相手に勝った』曰く、『哀川潤の踏み込んだ建物は例外なく崩壊する』といった感じの武勇伝だ」

「ここにいない人のことを悪く言うのもあれんだけど…本当に人間？」

魔理沙はさっきのキラキラした顔から一転、呆れたような顔で剛毅に聞いた

「分類上、間違いなく人間だ…よく、『人類最強』を『化け物』と呼ぶ奴がいるが、どちらかと言うと『超人』という表現のほうが正しいと俺は思う……」

「その哀川潤って奴と剛毅ってどんな関係だったんだ？」

「自分と同じ肉弾戦の零崎が居るのに興味を持った『人類最強』が俺に喧嘩を吹っかけてきたのが始まりだ…それ以降なんだかねで奴と関わる機会が多かっただけだ…ちなみにあいつとの殴り合いで俺はあいつに勝ったことがねえ」

「哀川潤って奴が強いのか剛毅が弱いのか分からなくなるぜ……」

「言っておくが俺はどっちかって言うと強い方だと周りの奴等から言われたことがある……あいつは何と言うか…ジャ プの主人公みたいになやつなんだよ……」

「ジャ プ？あのこーりんの店にある漫画の？」

「あるのかよ、あの店にジャ プ……」

ここで魔理沙の口から出た『こーりん』は先ほど剛毅の言った『森近の兄ちゃん』こと森近もりちか之助りんのすけのことである

剛毅とは反対側の同じく里のはずれ、『魔法の森』の近くに『香霖堂』こうりんを営んでいる人間と妖怪の混血児とのことらしい……

何でも屋開業時、わざわざ魔理沙と一緒に挨拶に訪れたのを剛毅は覚えている

「そのジャ プの主人公と同じってどういことなんだぜ？」

「哀川潤は一度負けた相手には絶対負けないうっていうパワーインフ

し持ちだからだ…まったく、どこの孫 空だよ…」

「ばわーいんふれ？何なんだぜそれ？」

「敵が強いと哀川潤も強くなり、哀川潤が強くなるとまた新たな強い敵が現れるこれの繰り返しのことだ」

「出鱈目なんだぜ……」

「そういう奴なんだ…ところでお前さんはいつまでここにいるんだ？」

「気の済むまでなんだぜ！」

「…依頼者が来たら帰れよ…」

「わかったんだぜ！でも、この事務所物が少なくない？」

剛毅の事務所の内装は作りは工事の際、洋式に近い作りにももらった

そのため、畳ではなくフローリングの床になっている、家の中は二

つの部屋に分けられ、一つは脚の短いテーブルに二つのソファが置いてある応接室

もう一つは台所と仮眠用の布団が敷いてある部屋になっている

ちなみにこの部屋の内装を手掛けたのは幻想教の中で一際科学技術が発展している河童達である…

こうして見ると確かに剛毅の事務所は物が少ない

「ここで生活しているわけじゃないからいいんだ」

「ふん」

こんな感じで剛毅は魔理沙と会話しながら依頼の仕事を待っていた

結局、この日依頼は全く来ず、魔理沙は日暮れ近くまで剛毅の事務所に居座ることになったのであった

第7打・零崎轟識と霧雨魔理沙（後書き）

いかがでしたか？

感想待ってます

第8打・零崎轟識と博麗霊夢（前書き）

前回までのあらすじ

普通の白黒泥棒魔法使いがやってきた

第8打・零崎轟識と博麗霊夢

「で？もう一回言ってくれるか？博麗の譲ちゃん…」

「耳が悪いの？神社の食料が尽きたから私に食べ物を持ってこいと
言ったのよ」

「……どうしてこうなった？」

この上なくうんざりした顔でソファにもたれ掛かる剛毅と、反対側
で偉そうにふんぞり返っているの霊夢という妙な構図となった原因
は今から三十分ほど時間を戻す必要があるので時間を戻させてもら
うことにしよう…

零

零

零

零

零

霧雨真理沙が事務所で意味もなく屯した日から四日が過ぎたある日の昼下がり…朝急に入った荷物運送の仕事を終え、事務所に戻った零崎轟識こと八重剛毅が事務所の扉を開けるとソファに座り、お茶を飲み、煎餅をポリポリ齧っている赤と白の腋が露出した一般とは変わったデザインの巫女服を着た少女…博麗霊夢がそこに居た

「あら、遅かったわね？お邪魔しているわよ？」

「…とりあえず聞きたいことを唯つらつらと言うから聞くだけ聞いてくれ…」

「？いいわよ…」

「何で居るんだ？鍵が掛つていただろう？どうやって開けた？なぜ入った？居ないことは分かっていただろう？なぜ勝手にソファに座っている？なぜ勝手茶を入れて飲んでいる？なぜ勝手に煎餅を食っている？帰ってきた事務所の主に対する一言目が『遅かったわね？』というのはいないんじゃないか？何でそんなに偉そうな態度なんだ？客とは言え不法侵入だろ？もう少し反省は無いのか？後悔は無いのか？何しに来た？暇つぶしか？仕事の依頼か？何なんだ？」

一気に話したからか剛毅は肩で息をしながらソファに座って煙草（未着火）をくわえた

「一気に言ったら答えられないわ……」

「じゃあ簡単に聞く、何しに来たんだ？博麗の譲ちゃん」

「食料が尽きたの……だから神社に食べ物を持ってきて、もしくは神社で料理を作って。あなたの奢りで」

「……………」

霊夢が何を言っているのか分からなくて言葉を失う殺人鬼

そして冒頭に戻るのであった

「…………俺は何でも屋だが、家政婦でも執事でもヘルパーでもないんだぞ？理解してるか？」

「あなたの料理はそこそこ美味しいと慧音から聞いたわ。だからあなたに頼んだのよ」

「お断りしたんだが……長期の依頼なんて村長の人里の警備と上白沢の姉ちゃんの寺子屋の手伝いだけで十分だ」

「どっしても?」

霊夢は涙目で剛毅に頼む

「……毎日じゃなく週一くらいなら何とかならないこともない、だから涙目をやめろ……」

結局、剛毅は折れた… 案外頼みごとに弱いのかも…

「そう、良かったわ。ところで話は変わるけどあなたの能力はどんな感じ? 慧音から能力を使う練習をしているって聞いたけど?」

「やっぱり嘘泣きかよ… それに上白沢の姉ちゃん喋り過ぎじゃないか?」

剛毅はふうとため息をついて霊夢に言った

霊夢本人は先ほどまで目尻に浮かべていた涙などとうに消え去り、ニコニコした顔で剛毅に違う話題を振る

「それで、能力のほうはどう? 使えるようになったかしら? 後お茶お変わり」

「ぼちぼちつてとこだ…自然にお茶要求すんな、そういうところ霧雨の譲ちゃんと一緒にだな…」

剛毅は霊夢の図々しさに呆れながら能力についての説明をする

「奪う能力は一応意識して制御出来るようにはなったが、まだまだ甘いつてところだ、奪えると分かっているのは『弾幕の支配権』、『妖力』、『魔力』、『相手が持っている武器』、『体力』と言った所だ…『弾幕の支配権』以外は相手に触れていないと出来ないがな……」

「ふーん、結構幅が広いのね…『捨てる』と『拾う』はどっなの？」

霊夢は当たり前のように部屋の棚から最中を取り出し食べ始めた

「おい、何でお前さんが俺の取って置いた最中の場所を知っている？」

「巫女の勘よ」

「そうかい……」

剛毅はツツコムことを諦めた

「で、『捨てる』能力については自分にしか作用しないことが分かった、例えば『痛みを捨てる』とすれば『自分の痛覚を失う』といった感じだな…使えるのか使えないのかよくわからん…『捨てる』能力は『捨てる』能力で捨てたものを捨てる能力だと俺は考えている。実際、『捨てた』痛覚を『捨てる』ことができたしな」

「なんだか微妙ね…」

「言ってくれんな…」

「事実でしょ？」

「否定はしない」

「ところでまた話題は変わるのだけれど…」

「なんだ？博麗の譲ちゃん」

「紫から受け取った『あれ』って何なの？」

霊夢は壁に立てかけられた『シームレスバイアス愚神礼賛』を指差した

「俺の血の繋がらない兄の武器だ」

「壊れたって言っていたけど、良ければ聞かせてもらえない？」

「なぜ、言わなきゃいけないんだ？」

「気になるからに決まっているじゃない」

「はあ…本当に図々しい巫女だ」

剛毅はもう一度はあとため息をついた

「幻想郷に来る一月ほど前、一人の零崎が殺された。それを聞いた零崎一賊はその相手に報復しに行った。零崎一賊は一賊に手を出したものを皆殺しにするまで許さない集団だから…しかし、次々と報復に言った零崎が殺された。ついに生き残りの零崎は俺を含めて四人…そのうち一人、零崎人識ひとしきは世間的に死んだことになってい

たから実質俺、『零崎軋識』せんしき、『零崎曲識』まがしきの三人だ。そして俺と

軋識で家賊への仇討ちのために相手の所に向かった」

「で、その相手を殺してきたと？」

「いや……」

剛毅は首を横に振った

「勝てなかった…『零崎四天王』と呼ばれていた俺と軋識の二人掛
かりでもあの『橙色の暴力』には勝てなかった…そのバツト…『愚
ムレスバイアス
神礼賛』もその『橙色の暴力』の攻撃の防御に使った瞬間に根こそ
ぎだった…」

「出鱈目ね……」

霊夢の言葉はまさに的を射た言葉だった

「『人類最強』以来だった…『勝てる気が微塵もしない』と思っ
たのは…結局、曲識がその場に駆けつけて俺と軋識を逃がしたこと
で俺と軋識は生き残った…」

「…その曲識って人はどうなったの？」

「それは言えない……こればかりはな……」

「そう……じゃあ私は帰るわ、夕食よろしくね？」

「おい待て、なぜ料理を持っていかなければならない？」

「週一私に料理を作ってくれるのでしょぅ？」

「……………もういい……」

その後剛毅は霊夢と共に博麗神社へ行き、晩御飯を作って帰った

もちろん剛毅のお金で……

第8打・零崎轟識と博麗霊夢（後書き）

いかがだったでしょうか？

零崎二人掛かりでも倒せない『人類最終』
…

そろそろ、異変編に移ろうと思います

感想待ってます

第9打・零崎轟識と紅い霧（前書き）

前回までのあらすじ

・巫女の食料が尽きた

・剛毅、過去を語る（ほんの少し）

それではどうぞ

第9打・零崎轟識と紅い霧

「これが『異変』ねえ。ただ真つ赤な霧が発生しただけじゃないのか？」

「それでも異変は異変だ。それにただ霧が発生するならまだしも霧が原因なのか、妖怪が里を襲おうとしているのは事実なのだから……」

とある日の晩、里の近くの森の中で剛毅と慧音は妖怪を相手にしながらそんな事を話していた

こうなった経緯は今より一時間ほど前、夕食を終えた剛毅と慧音のもとに霊夢がやってきた

「慧音、剛毅！」

「どうしたんだ、霊夢」

「なにかあったのか？」

「異変よ、異変！外を見なさい！」

霊夢に言われ、剛毅と慧音は外を見た

外は真っ赤だった…

真っ赤な霧で覆われていた

「紅いな…」

「そうだな…」

「とうわけだから私は異変解決に言ってくるわ。これに乗じて里を襲う妖怪がいるかもしれないから二人ともよろしくね」

「任せてくれ！」

「請け負った依頼はしっかり果たすのが何でも屋だ」

剛毅と慧音の言葉を聞いた霊夢は安心した顔で空を飛んで行った

「さて、それでは村の警備に行くぞ。八重」

「了解だ…まったく、退屈しないなあ幻想郷は…」

そう言って剛毅は慧音の後に続いて家を出た

零

零

零

零

零

「…とまあええはこんなものか？」

「そうだな、霧も消えて夜も明けてきた…」

夜が明け始めたころようやく霧が消え妖怪も逃げ出したので剛毅と慧音はお互いに攻撃の手を止めた

「さて、帰るか八重…八重？」

シ死屍シシシし死屍シシシし死屍シシシし死屍シシシし死屍シシシし死屍シシシし

!!!!!!

剛毅は笑った

前振りもなく、前置きもなく、予兆もなく、予告もなく、突然に、突発的に、狂ったように、壊れたように、子供のように、殺人者のように、殺人狂のように、いや…

殺人鬼らしく嗤った

「いやいやまさか、こんなところで感じるとは思わなかった…久しい…本当に久しいなこの感覚は…」

「幻想郷こんなとで出会えるとは思わなかった…」

「これは迎えに行くしかないだろう?」

「兄として迎えに行くしかないだろう?」

「待っている…まだ見ぬ新たな零崎（兄弟）よ!」

そう叫ぶや否や剛毅…いや、零崎轟識は駆け出した

幻想郷では紅魔館と呼ばれる真つ赤な屋敷へ…

今回の異変の元凶の場所へ…

唯々真つ直ぐに、一心不乱に駆け出したのだった

零

零

零

零

零

場所は変わり舞台は紅魔館…

つい先ほどまでここでは吸血鬼でありこの館の城主、レミリア・スカレットと博麗の巫女、博麗霊夢が弾幕ごっこで激しい戦いを行っていた場所である

その紅魔館の地下にある一つの部屋で一人の少女が蹲っていた

名をフランドール・スカーレット…生まれついでての能力の危険さと
精神の不安定さゆえにこの館の地下に閉じ込められている

彼女は虚空を見つめながら何かをつぶやいていた

「…壊したい…人間を…壊したい………」

第9打・零崎轟識と紅い霧（後書き）

という訳で零崎轟識にとつての紅魔郷編導入部です

感想待っています

第10打・駆ける殺人鬼（前書き）

前回までのあらすじ

- ・ 剛毅、紅霧異変不参加
- ・ 異変終了直後、零崎轟識覚醒

第10打・駆ける殺人鬼

走る

走る走る

走る走る走る

走って、駆けて、飛んで、また走る

邪魔なものはその拳で砕きながら…殺人鬼^{カレ}は駆ける

慧音の元から駆けだした零崎轟識は紅魔館へ向かって一直線に走っていた

しかし、ここで二つ疑問が挙がる。

『なぜ？零崎轟識は場所の分からない紅魔館を一直線に目指せるのか？』

そして『なぜ彼は紅魔館を目指すのか？』

疑問の答えは簡単にして明快

零崎は同じ零崎の人間を感じる取る…言うなれば『家賊意識』を持っている

轟識は紅魔館の方向から零崎の存在を感じ取り、その方向へ向かっているだけに過ぎない

結果的に紅魔館を目指しているだけであって決して、紅魔館に目的があつて向かつている訳ではないのだ

轟識は道中羽を生やした小さな人型の生き物：妖精を両の拳で殴りながら向かつていると目の前に大きな湖が現れた

轟識は湖を一瞥するとすぐさま湖の縁を沿うように走りだした

すると、轟識の側面から轟識に向つて氷でできた弾丸…（数からみて弾幕と表現したほうが良いくらいの数）が飛んできた

轟識は視界の端で弾幕を認識すると走る速度を上げた

轟識の後ろの弾幕が次々と着弾していく、しかし轟識は構うことなくさらに速度を上げた

すると今度は轟識の目の前に少女が現れた

青を基調とした服を着て、背中から氷の羽を生やした少女だった

さすがに目の前に現れたので轟識は走るのを止め、立ち止まった

「あたいを無視するなんていい度胸ね、剛毅!!」

少女はビシッと轟識を指差し、そう言った

この少女、チルノは以前轟識の店に悪戯しに行つて逆に捕まつたと

いう経緯を持っている

「チルノの嬢ちゃんか…生憎、今俺はお前さんと遊んでいる暇はない。これから弟か妹かわからんが家賊を迎えに行かなければならぬ」

「どうしてもあたいを無視する気のようなね…氷漬けにしてやる！」
雪符・ダイヤモンドブリザード』！」

チルノは懐から取り出したカードを掲げると轟識に向かって氷柱のような弾幕が出鱈目に向かって飛んでくる

轟識はそのままチルノへ向かって駆けだした

当然轟識の目の前に大量の弾幕が飛んでくる

轟識はそれを最小限の動きで回避していく

奇しくもその動きは弾幕ごっこで言う『ちよん避け』、『 그레이즈』と呼ばれる行為とまったく同じだった

轟識は弾幕をすべて避け切り、その勢いのままチルノの頭上を飛び越え、そのまま走り去って行った

「ひそひそ！？」

チルノの叫びは空しく湖に木霊した

零

零

零

零

零

チルノを飛び越えてそのまま走ってきた轟識はついに紅魔館に辿り着いた

屋根や壁が真っ赤に染められた紅魔館の外観をほんの少し見た後、門へ歩いていくと

「誰ですか、あなたは？」

一人の女性が立っていた

緑と白を基調とした中華風の服を纏い、赤い長髪に星に籠と書かれたワンポイントがある緑色の帽子をかぶった女性だった

「…この門番か？」

「そうです。ここ、紅魔館の門番を務める紅美鈴ほんめいりんと言います。もう一度聞きます、あなたは誰ですか？ここに何用ですか？」

美鈴は轟識への警戒を一切緩めず再度轟識に問う

轟識は煙草をくわえ「火をつけながら」答えた

「…零崎轟識、ここへは家賊を迎えに来た…」

「家族？何を言っているのですか？霊夢さん達のお知り合いですか？霊夢さん達ならお帰りになりましたよ？」

「博麗の譲ちゃん達とは俺は今関係ない。俺の目的はこの屋敷にいる家賊だけだ…邪魔をするなら力づくで押し通る……」

そう言っつて轟識は拳を構えた

「何を言っているのかはわかりませんが、侵入者なら容赦しません！弾幕ごっこじゃなく格闘戦で私に挑むとは…でも容赦はしません！」

美鈴も構えた

「んじゃまあ……家賊のために零崎を始つか……」

「紅魔館の門番、紅美鈴。行きます！」

殺人鬼^{ゴウシキ}と門番^{メイリン}は全く同時にお互いに向かって駆けだした

(零崎轟識…紅美鈴に対し零崎を開始)

第10打・駆ける殺人鬼（後書き）

いかがだったでしょうか？

一面、二面のボスはスルー

ルーミアえ…

チルノえ…

次回はVS美鈴戦を予定

感想待っています

第11打・零崎轟識と紅美鈴（前書き）

前回までのあらすじ

ルーミアえ…チルノえ…

それではどうぞ

第11打・零崎轟識と紅美鈴

拳と拳が交差する

脚と拳が交差する

拳が地面を破壊する

脚が壁を破壊する

拳が頬を切り、蹴りが服を切る

紅魔館の門番、紅美鈴と殺人鬼、零崎轟識が拳を蹴りを繰り返すたびに極一部であるが建物が地形が破壊されている

そんな中、美鈴は目の前の侵入者、零崎轟識に驚愕していた

美鈴は妖怪である。

当然人間とは比較にならないほどのポテンシャルを誇ることは自他共に認めざる得ないことである

さらに、自身の能力、『気を使う程度の能力』は人間では到底辿り着くことができない年月の修練で身に付けた格闘技術と相まって格闘戦においては紅魔館の主にも認められるほどである

本来ならば開始一分も経たずに目の前の侵入者は地に伏せてあるはずである

しかし、目の前の侵入者、零崎轟識は地に伏せるところか『拮抗』しているのがある

妖怪である美鈴とである

驚愕しないほうがおかしい話である

実際美鈴が轟識に与えたダメージと言えば先程放った蹴りで轟識のジャケットの一部を切っただけである

それに対して美鈴が受けたダメージは最初の拳のぶつかり合いで拳の骨に罅が入り、擦れ擦れで避けた拳で頬を切られ、血が流れていた

先程『拮抗』していたと言っていたが、明らかに美鈴が『劣勢』であった

美鈴は最初の一撃以降、轟識の攻撃を防御していない

すべて大きく回避しているのだ

美鈴は直感で感じたのだ

『あの拳を受けてはいけない』

美鈴の戦闘スタイルは中国武術：取り分け太極拳を用いた格闘戦である

太極拳のみならず中国武術には『化剋』^{かけい}と呼ばれる気を纏い、相手の攻撃を逸らす手段があるのだが、轟識の拳はあろうことが、美鈴の化剋ごと殴ったのだ

つまり、轟識の拳に防御は無意味だと美鈴は実感したのだ

「どうした門番？攻撃の手が緩いぞ？」

「!?!」

轟識の言葉に美鈴は顔を歪める、拳を痛めたこともあり、美鈴は拳よりもリーチもあり威力もある蹴りで反撃を行うが、轟識に比べて些か消極的であった

美鈴は頭の隅で考えてしまうのである

『もし、あの拳を脚に受けたら確実に足が壊れる』と

妖怪である美鈴は人間と違って圧倒的に怪我の回復が早い

それこそ、体中にナイフが刺さっても一時間やそこらで完全に回復してしまうほどに

しかし、いくら回復が早いといっても脚を骨折などで破壊されては回復まで満足に動けなくなってしまふ…

それでは門番の意味はない

美鈴はこのまま轟識を足止めし、事態に気付いた屋敷の主やメイド長の応援を待とうと思いを切り替えた

しかし、その隙を突かれた

「このままダラダラ殺り合ってる暇はないんだ…」

「っ!?!?」

轟識は美鈴の蹴りを後ろに飛ぶことで回避した後、一気に美鈴との距離を詰める

爆発的といっても謙遜ない加速だった

「破ああ!?!…」

美鈴は半ば反射的に蹴りを轟識に向かって放つが…

「ちっちと…」

その蹴りは轟識の髪を一房刈り取る程度だった

「壊れて消えろ」

轟識は迷うことなく美鈴に拳を突き出した

美鈴は両の手で轟識の拳を防ぐが、骨が折れる嫌な音と共に屋敷の門を突き破り、そのまま十数メートルは離れているであろう屋敷の玄関ドアまで破壊してようやく美鈴は止まった

美鈴の両手は完全に折れ、肉を突き破り骨が飛び出していた

さらに運が悪いことに玄関ドアが木製であったせいでドアが壊れた際、生じた木の破片が美鈴の右足の太腿に突き刺さっていた

美鈴は当然に意識を失ったが腕から伝わる激痛で再び意識が戻る

「う…ああ…」

そんな美鈴のもとに轟識はゆっくりと歩み寄っていく

「まさか、腕が壊れる程度で済むなんてな…お前さん、妖怪か？」

轟識の問いに美鈴は答えない、答えられない

「まあいい、妖怪だろうと何だろうと俺の零崎は相手を壊して消すまで終わらない…今度こそ、壊れて消えろ」

満足に動けない美鈴にはまさに死刑宣告だった

轟識は動けない美鈴との距離をさらに詰める

美鈴と轟識の距離が三メートル程になったとき、その声は聞こえた

「あら、勝手に門と玄関と門番を壊して何をしているの？あなた…」

美鈴の後ろに少女が立っていた

青みがかった髪に背中から蝙蝠のような羽を生やした少女はその体に似つかわしくない濃厚な殺気をあふれさせていた

「…随分な殺気じゃないか、お嬢ちゃん」

轟識は相変わらず笑みを浮かべながら少女に問いかけた

「あら、そう言うあなたも人間にしてはなかなかの殺気じゃない…
侵入者さん？所で、あなたのお名前を教えてくださいませんか？」

「…零崎轟識だ…お嬢ちゃんの名前は？」

「この紅魔館の主、レミリア・スカーレットよ。さて、私のかわいい門番をこんなにしてどう責任を取ってくださるのかしら？」

レミリアの殺気が濃くなっていく

「…殺人鬼が人殺しの責任をとると思うか？」

「殺人鬼だったの？あなた…まあ確かにその通りね…あなたは……」

レミリアがそこまで行ったところで突然館の壁が爆散した

瓦礫となった館の壁からもう一人少女が現れた

レミリアと違い金色の髪をサイドで纏め、背中から七色の宝石のようなものがついた細い枝のような羽を生やした少女だった

「フラン？なぜここに……」

「あは おねえちゃん……」

フランの発した言葉でレミリアは不気味さを覚えた

ここ数年レミリアとフランドールの仲はお世辞にも良いとは言えない
お互いに『あいつ』呼ばわりするほどに

だからこそフランドールの『おねえちゃん』という言葉に違和感を
覚え、同時に不気味さを感じたのだ

「おねえちゃん…そこのお兄さんはだあれ？人間？」

「フラン…？…？…どうしたの？」

レミリアはフランドールの言動に違和感を拭えないままフランに尋
ねる

「わたしね、今とおっても人間を壊したいのよ」

フランドールの言葉でレミリアは目を見開いた

レミリアももしかしてと置いていたがやはり、フランドールは自身
の能力：『あらゆるものを壊す程度の能力』の狂気に吞まれていた
しかしレミリアは再び違和感を覚えた

普段狂気に吞まれたフランドールなら人間だろうと動物だろうと物
だろうと関係なく『壊そうとする』はずだ

しかし、今フランドールは『人間を壊したい』と言ったのだ…

「……いやいや、まさか…こんな嬢ちゃんがねえ…」

すると先ほどまで言葉を発しなかった轟識が口を開いた

「初めましてだお嬢ちゃん。俺は零崎轟識…お前さんの兄になるかもしれない者だ…」

「何を言っているの!?!」

レミリアは憤慨した様子で轟識に怒鳴った

当然だ、急に出てきた男が自分の妹にそんな事を言っているのだから…

「お兄さんが？わたしのお兄さんになるかもしれないって？あははは面白いな、お兄さん、コワシテシマイタイクライニ…」

言つや否やフランドールは弾幕を展開し始めた

轟識も拳を構える

「さっき、美鈴とお兄さんが戦ってるところお屋敷からこっさり見てたんだよね、その時のお兄さんの言っていた言葉が今の私のこの気持ちにぴったりのな」

「あの距離から？見えるだけじゃなくて声も聞こえたのか？お前さんも妖怪かい？」

「だって、私は吸血鬼だもん　じゃあ、ゼロザキを始めましょ」

フランドールは言葉と共に弾幕を放った

「零崎に目覚めてすぐに零崎を始めるのか？やんちゃな妹だなあ！」

轟識もそう言ってフランドールの突撃した

(零崎轟識…フランドール出現により、零崎中止)

(フランドール・スカーレット…零崎轟識に対し零崎を開始)

第11打・零崎轟識と紅美鈴（後書き）

いかがだったでしょうか？

美鈴瞬殺…美鈴え…

フランとの戦闘が強引…許してください…

感想待ってます

第12打・零崎轟識と弾幕じっしん(前書き)

前回までのあらすじ

美鈴撃破

妹様が零崎に覚醒

第12打・零崎轟識と弾幕ごっこ

「『禁弾・スターボウブレイク』!」

フランドールが轟識に向って七色の色鮮やかな弾幕を放つ

轟識は弾幕ごっここのグレイズと同じ要領で弾幕をよけていく

「おいおい、俺は弾幕とやらは撃てないんだぜ?お嬢ちゃん…!」

「でもぜんぶ避けてるでしょ?大丈夫だって」

「大丈夫かあ〜?」

などと二人は呑気に会話をしているが轟識の周りは弾幕が轟識を覆い尽くさんばかりの数だった

「ところでよお、お嬢ちゃん。ちよいと質問に答えてもらってもいいかい?」

「ん〜?なあに、お兄さん?」

轟識がフランドールにそう聞くとフランドールも笑顔のまま了承する
ただし、弾幕ごっこは続行のまま…

「お前さんが人間を殺したいと思い始めたのはいつからだい？」

「えつとね…最近！」

「最近ね…それって一月くらい前からかい？」

「私、ずっとお部屋にいるからそういうの分かんない…『禁忌・カ
ゴメカゴメ』！」

つまり、フランドールは轟識が幻想郷に来てから零崎に目覚めたこ
とになる

轟識がそう考えていると再びフランドールがスペルカードを発動さ
せると轟識を取り囲むように弾幕が正方形を形作りながら配置され
ていく

「おいおい…俺の動きを止めるつもりか？讓ちゃん…」

「まつさかゝそんなことしないよゝ私は待つているなんてうんざりだもん 退屈だしね」

フレンドールがそう言いながら轟識に向かって大きな弾幕を三発撃ち出した

しかし、弾幕に囲まれているといっても避ける場所がないほど狭く囲まれているわけではないので轟識は難なく大型の球を回避

しかし、大型の球のあとに轟識を囲っていた小型の球の弾幕が不規則に動き出した

「なるほどな…お前さんに似てジッと待つのが嫌だったか？それに退屈が嫌なのは同感だ！」

「そういうことゝ お兄さんもわかってるねゝ」

フレンドールは無邪気とも言えるほどの笑顔を浮かべているが、辺りはまったく力を抑えていない弾幕が飛び交っている

「本当にやんちゃだなあ…兄としては苦勞が絶えなさそうだ…」

「やんちゃな妹は嫌い？」

「いいや、俺の兄の双識曰く、『手にかかる弟、妹の世話は兄の腕の見せどころ』だそうだ！」

「あははは 何それえ面白〜い！」

スperlカードの効果はまだ続いており、未だに轟識の周りを小型の弾幕が正方形の形で轟識を囲み、大型の球を二〜三発轟識に向かって発射

その後、轟識を囲っていた弾幕が囲いを崩し不規則に飛ぶという状況を繰り返していた

「まったく、何時までこうしていれば良いんだ？」

突然轟識がそう呟いた

確かに、本来は零崎に目覚めたフランドールを家賊として勧誘、里に戻ってフランドールに零崎について丁寧なレクチャー。

そして、フランドールに零崎に名前を与え、立派な零崎に育てるという遠大な予定があったのだが…

実際はこうしてフランドールに一方的に弾幕で攻撃されるという状況である

どこで選択肢を間違えた？

どうしてこうなった？

と考えている轟識であった

「わかんない！」

フレンドールは相変わらず笑顔で弾幕を打ち続けている

「……もともと俺はお前さんを家賊として迎えに来ただけなんだからなあ……」

ようやく本来の目的を思い出したというか、ようやく本題に入れた轟識だった……

「そうだったの？私は楽しいからいいけど？」

「俺は良くねえ……仕方ねえ、やりたくないけど一回気絶させて……」

轟識がそういった瞬間、世界が止まった

「ちょっとそれは困るわね……『抹消欠陥』さん？」

この幻想郷で轟識のことを『抹消欠陥』と呼ぶのはただ一人

「どうして邪魔をするんだ？八雲の姉ちゃん？」

轟識の背後には隙間から出てきた八雲紫と銀色の髪のメイド服を着た少女…そして、レミリア・スカーレットが立っていた

第12打・零崎轟識と弾幕ごっこ（後書き）

どうでしたか？

弾幕ごっここのシーンは書くのが大変

感想待ってます

第13打・止まった世界の中で（前書き）

前回のあらすじ

轟識、エクストラボス戦開始

ゆかりんにストップがかかる

第13打・止まった世界の中で

「八雲の姉ちゃんとかっさきの…スカーレットのお嬢ちゃんに…そっ
ちの譲ちゃんは誰だ？スカーレットの譲ちゃんの身内か？」

轟識が銀髪の少女のほうを向くと少女はお辞儀をしながら答えた

「初めまして、紅魔館のメイド長を務めております。十六夜咲夜と
申します」

「メイドねえ…あんまりいい思い出がないな…ところであの嬢ちゃん
が止まっているのはお前さんの能力か？」

「そうよ、咲夜の能力は『時間を操る程度の能力』…これで私た
ち以外の時間の流れを限りなく遅くしているのよ」

咲夜の代わりにレミリアが説明をした

「説明どうもスカーレットの嬢ちゃん。で…さっさきの質問だが、な
ぜ邪魔をする？八雲の姉ちゃん…理由を聞かせてもらおうか？」

轟識は紫の方を向いた

紫は相変わらずうつすらと笑みを浮かべてはいるが、目は真剣そのものでまったく笑っていない

「私があなただの邪魔をした理由？端的にいえば、今のあなたを放っておくと将来幻想郷に良くないからよ」

紫はパンと扇子を畳みながらそう言った

「どづいうことだ？」

轟識は紫に聞き返した

「あなたはあの子を殺人鬼にするつもりだったのでしょうか？家族と
言っていたようだし…」

「その通りだ。零崎に覚醒した以上、殺人鬼として生きる以外の道
は極めて望み薄だ」

「そうなのですか？」

咲夜が紫と轟識の会話に割って入るように聞いてきた

「零崎が持つ殺人衝動と言うべきものは不治の病のようなものだ。一度発症、進行してしまえばもうどうにもならない…抑えようと思つて抑えられるものじゃない。一賊の勧誘を断つて結局、親類、縁者、友人を皆殺しにして最終的に自分すら殺した零崎に目覚めたもの…言うなれば零崎候補の人間がいたという話も聞いている…」

「そんなことが…」

「ま、そういう訳だから俺は八雲の姉ちゃんと言つた通りあの譲ちゃんを零崎として育てるつもりだった。この場の譲ちゃん以外を皆殺しにしても、攫つてでも…な」

「それよ。それが問題なのよ」

紫が轟識を指さしてそういつた

「妖怪でも屈指の力を持つ吸血鬼なうえに殺人鬼なんて…幻想郷の人々を全滅させかねないじゃない…私は、人と幻想が共存できる場所を作るために幻想郷を創つた…だから、その幻想郷をどのような形でさえその幻想郷を汚そうとする者は…」

「消すわよ…零崎轟識…」

紫の妖気にレミリアと咲夜が体を震わせる

「それで、俺にあの譲ちゃんを諦めると言うのか？」

「その通りよ」

「そっちで槍とナイフを構えているお二人さんも同じ意見か？」

ふとレミリアのほうを見ると真つ赤な槍を構えたレミリアと両手の指の間にナイフを挟んでいつでも投げられるように構えている咲夜がいた

「当然ね、家族を殺人鬼に渡すわけにはいかないもの」

「お嬢様の言うとおりです。私も紅魔館のメイドとしてあなたを止める義務があります」

轟識は相変わらず飄々とした顔だ

「しかし、俺が諦めたとしてあの譲ちゃんはどうするんだ？あの譲

ちゃんが零崎に目覚めた以上、これから誰彼構わず人を殺すぞ？ど
うするつもりなんだ？」

「そのことについては考えがあるのよ……」

紫は珍しく覇気のない声で答えた

「なんだ？八雲の姉ちゃん」

「あなたの能力よ…『抹消欠陥』…零崎轟識」

「まさか、俺の能力頼みだったとは…驚きだよ、八雲の姉ちゃん」

「これ以外この状況を打破できる最善の状況はないの…それ以外に
はあの吸血鬼の子を殺す以外方法がないのよ…」

「そうなった場合、私と咲夜はあなたとそこの殺人鬼の両方に牙を
むけるわよ？」

レミリアがジロリと紫を見た

「さっきまであなたを消すとか言っていた私と言える立場じゃないけど…このままだと少なくない影響が幻想郷に訪れると私は感じているの…お願い、協力してください…零崎轟識」

八雲紫は頭を下げた、あの八雲紫がである

「……………はあ…わかったよ、意地はって八雲の姉ちゃんに殺されるのもごめんだし、このまま話が平行線を辿るのもあれだしな…協力しようじゃないか、だからさっさと演技をやめろ」

「あらそう。こんなにすんなり話が進むなんて予想外だったわ」

さっきまでのしんみりした表情はどこへやら、紫は口元を扇子で隠くしココロ笑った

「あなた…さっきの演技だったの？」

レミリアがジト目で紫を見た

「話の内容は本当よ？『抹消欠陥』が私のお願いを聞き入れなかったら今回の騒ぎの原因である『抹消欠陥』とあの吸血鬼…後顧の憂いを断つためにこの紅魔館を消すつもりだったわ」

「ちらつと恐ろしい」と言っな…この姉ちゃんは…」

「同感よ…」

「それで、あなたは妹様を止める策があるのですね？」

「簡単よ、『抹消欠陥』があの子の吸血鬼に近づいてあの子の狂気を能力で『奪う』のよ。私たちはその援護、簡単でしょ」

「言葉にするなら簡単だな…」

「一番厄介な役を押し付けられた轟識はそういった」

「でも、フランの弾幕はすでに弾幕ごっこの領域を逸脱しているわ…」

「そこは気合と根性で何とかするしかないわ」

「…」

「しかし、ほかに方法はなさそうですね」

四人はフランドールのほうを向いた

「それじゃあ、そのメイドが能力を解除した瞬間、行動開始よ」

「んじゃまあ…いつちよやるか」

「妹を止めるのは姉の役目ですもの…」

「…能力を解除します」

紫、轟識、レミリア、咲夜の順で言葉を発した後、世界は再び動き出した

第13打・止まった世界の中で（後書き）

いかがでしたか？

ゆかりんマジ計算高い…

書いてるとき、つくくの『悪い女』が頭をよぎった

俺だけです…

感想待ってます

第14打・零崎終了(前書き)

前回までのあらすじ

ゆかりんがログインしました

PA…ゲフンゲフンメイド長がログインしました

この小説のフランの弾幕は通常のEXステージの2倍の弾幕の量になっております。

ノーマルシューターならコントローラーを投げ捨てるレベルです

それともう一つ…中身短けえ…どうしてこうなった…

第14打・零崎終了

「あら？今度はお姉ちゃんたちも一緒に来るの？」

「そうよ、あなたを止めるためにね！」

無邪気に問いかけるフランドールにレミアはキツと鋭い目で答える

「あははは！どうでもいいよそんな事 でも…四対一は卑怯だよね？だ・か・らあ『禁忌・フォーオブアカインド』」

フランドールが三回目のスペルカード宣言と同時にフランドールの姿がブレて次の瞬間にはフランドールは四人に分かれていた

「分身もすんのかよ…忍者か？お前さんは…」

轟識の声をかき消すかのように四人のフランドールは赤、青、黄、緑と色とりどりの弾幕を放つ

「飛んでくる弾の数が半端じゃねえぞ！」

「私が行きます！『時符・パーフェクトスクウェア』！」

そこへ咲夜がスペルカードを発動させる

一瞬、赤と青の四角形の波紋が広がり、次の瞬間には赤色の弾幕が動きを止める

「あはははは！さっすが咲夜ね！でもまだまだあ」

それでもフランドールの弾幕は視界を埋めつくさんばかりの量だった

「咲夜だけじゃないわよ！」

咲夜の前にレミリアが立つ

「次はお姉ちゃんなのお？まけないよ？」

「私も負ける気はないわよ『紅符・不夜城レッド』！」

レミリアがスペルカードを掲げるとレミリアの左右から赤いレーザーがフランドールに向かって伸びる

「レーザーはあの白黒魔法使いの専売特許じゃないわ!」

二本のレーザーは青の弾幕の一部を消し去り、そのままフランドールの分身二体を貫いた

レーザーはそのまま左右に扇形を描くように移動する

そして青の弾幕の残りとフランドールの分身を消し去った

「すごいねお姉ちゃん!私の分身を二人も消すなんてすごいね」

分身を消されてもフランドールは相変わらず笑ったままだ

フランドールの放った弾幕は半分近く減っていたが、それでも弾幕の量は相変わらず多い

「次は私ね…行くわよ、藍」

「はい!」

紫はレミリアと入れ替わるように前に出る

紫は自身の式紙である八雲藍をいつの間にか呼び出していた

「『境界・永夜四重結界』！」

紫はスペルカードを掲げ、スペルを発動させる

すると紫の周りに赤と青の四つの結界が現れ、結界に触れた黄色と緑の弾幕が消えていく

藍は紫の結界を抜けてきた弾幕を弾幕で撃ち落としていく

弾幕はまだ残っているがこれで轟識とフランドールとの間に道ができた

それを待っていたかのように轟識はフランドールへ向けて加速した

そして轟識は宙に浮いているフランドールめがけて飛びあがった

「すごいすごい！まさかここまでやるなんてね！でもお兄さん、私の分身はもう一人いるんだよ？」

その言葉とともにフランドールの分身が轟識に掴みかかるようにする

「空中だったらよけられないよね？」

「させないわよ！『神槍・スピア・ザ・グングニル』！」

レミリアがすばやくスペルを唱え、フランドールの分身へ向け真っ赤な槍を投擲する

横から不意にきた槍に分身は反応できず槍に貫かれて消えた

「え？」

フランドールは思わぬ横やりに轟識から視線をそらしてしまった

その瞬間に轟識はフランドールの顔をアイアンクローの形で掴んだ

そのまま轟識に掴まれたフランドールは地面に落下していく

「嬢ちゃん…どうやら、今の嬢ちゃんには零崎はまだ早いようだから…」

轟識はフランドールを掴んだ手に力を込め…

「^{そいつ}狂気は没収だ！」

轟識は能力を発動した

轟識の能力は『奪う・捨てる・捨う程度の能力』…その中の『奪う』能力で奪えるものは『妖力』や『体力』といった目に見えない概念的なものも奪うことができる

そこで、紫から轟識の能力でフランドールを止めると聞いた瞬間にこう思ったのだ

『フランドールの狂気を奪うことができるのではないか？』と…

それでも奪えるのかもわからない上に、轟識はまだ完璧に能力を制御できるわけでもなかったのでかなり分の悪い賭けであったが、能力が無事に発動したのでどうやら成功のようだ…

「あああああああああ！！」

フランドールが絶叫を上げそのまま意識を失った

轟識は咄嗟にフランドールを抱え、地面に着地した

こうして、紅魔館で起こった二つの零崎は二つとも中止という形で幕を下ろした

（フランドール・スカーレット…零崎轟識の能力により気絶、零崎
中止）

第14打・零崎終了(後書き)

感想待ってます

第15打・零崎が終わって…(前書き)

前回のあらすじ

1 (フランドール) VS 5 (轟識・レミリア・咲夜・紫・藍) という恐ろしい構図を見た

第15打・零崎が終わって…

「まったく…慧音から聞いて驚いたわよ…私たちが帰った後にこいつらに喧嘩売ってたなんてね…」

紅魔館の一室で霊夢が椅子に腰かけながらそう言った

轟識がフランドールを気絶させた後、レミリアは咲夜と紅魔館地下にいる魔女…パチュリー・ノーレッジの使い魔、小悪魔に美鈴とフランドールを紅魔館の一室に運ばせ、パチュリーに治療を要請した。

そしてレミリアは轟識を簡易ながら拘束、フランドール達とは違う一室に監禁に近い形で待機させられた

見張りには咲夜が付いている

そして、小悪魔が轟識の保護者の立場にある慧音に咲夜から聞いた事の顛末を話し、慧音は霊夢に聞いたことを報告した

慧音の代わりに紅魔館に来た霊夢は咲夜の案内で轟識のいる部屋に通され、両手を拘束されている轟識を見た霊夢が冒頭のセリフを言っ
って今に至る

「別に、博麗の譲ちゃんには関係ないことじゃないか？」

「私が呼び出された時点で関係大有りなのよ！」

霊夢は頭に鬼の角を幻視させるような顔振りで轟識を怒鳴った

その時、部屋の扉が開かれ、咲夜を伴ってレミリアが入ってきて、それに続くように紫も部屋に入ってきた

「何を騒いでいるのよ、霊夢」

「近くの部屋に怪我人も居るのでお静かにお願いします」

レミリア、咲夜が霊夢を見てそう言った

「待って、なんで私責められてるのよ……」

霊夢は心外だとばかりにレミリア達に反論しようとする

「なんでって、霊夢が大声出したからじゃないかしら？」

「博麗の譲ちゃん、怪我人を労わろうや……」

そこに紫と轟識が止めとばかりに言葉を発した

それを聞いた霊夢は床に手をついて、私は悪くないとブツブツ言い始めてしまった

零

零

零

零

零

レミリアたちが部屋に入ってきてから十分ほど経ってようやく霊夢が元に戻った

「さて、スカーレットの譲ちゃんたちは俺に何の用だ？紅の姉ちゃんレミリアの看病はいいのかい？」

「美鈴は妖怪よ？生命力や治癒力は人間の比じゃないわ。それに今パチエが治療を行っているわ…パチエは治療系はそんなに得意じゃないけど、しっかり治してくれるはずよ」

レミリアは轟識の問いに迷いなく答える

「そうかい、そりゃよかった」

それを聞いた轟識は興味なさげに返事をする

「それはそうと、フランの様子はどのなの？八雲紫」

轟識が会話を終えてしまったため、レミリアは紫にフランの容体を聞いた

紫はレミリア達の代わりにフランドールの様子を見ることを買って出たのだ

「狂気は取り除かれていたから、目が覚めたらいきなり襲いかかってくることはないわ、安心なさい。それにどこにも怪我らしい怪我はなかったわ…」

「そう…」

レミリアは表情こそ変えなかったが、声に安堵の意思が感じられた

「ただ…」

紫はその後レミリアと轟識を唾然とさせる台詞を口にした

第16打・八雲紫の要求（前書き）

前回のあらすじ

・紅魔館メンバーが空気…

第16打・八雲紫の要求

「レミリア達が起こした『紅霧異変』からもう三日…時は過ぎるのは早いと思わないか？剛毅」

何でも屋『轟』の応接用兼寢床であるソファに腰かけ、お茶を啜っていた普通の魔法使い…霧雨魔理紗が黒塗りの作業机で新聞を読んでいるこの店の主人…八重剛毅にそう言った

「ああ…まっただくだな…」

剛毅も新聞を読みながら答えた

そんな時…

「お兄さん！いつまで新聞読んでのー？」

ひよここという擬音が聞こえそうな動作で一人の少女が剛毅と新聞の間に入り、剛毅の膝の上に座った

金色の髪に赤い瞳…背中に生えた色取り取りの宝石のようなものがついたとても羽には見えない羽根を生やした少女

今回の『紅霧異変』の首謀者…レミリア・スカーレットの妹で幻想郷で零崎に目覚めた吸血鬼

フランドール・スカーレットだ

どうして彼女がここにいるのかは三日前まで時間を遡らなければならぬ

零

零

零

零

零

「ただ…なによ、何かあるの？紫」

何か思わせぶりな態度の紫に霊夢は怪訝な顔で聞いた

「まあ、当然と言えば当然なことなんだけど轟識が『奪った』狂気はあくまで表面的なもの…つまり、根本的にあの子の狂気がなくなつたわけではないわ」

「なんですって!?!」

レミリアは先程までとは変わって憤慨した顔で紫に詰め寄る

「スカーレットの譲ちゃん、八雲の姉ちゃんの言うことは自然なことだ…狂気とは精神や心の問題だ…そんな簡単に治るわけがないだろっ…」

それを轟識が制した

「それは…」

レミリアは轟識の言葉で押し黙ってしまった

「それで、八雲の姉ちゃんは俺に何をさせようって言うんだ?」

轟識は紫にそう尋ねた

「あら、どうして私にあなたに頼みごとをすると思ったの?」

「勘だ」

紫の質問に轟識は即答した

「勘、ねえ…まるで霊夢みたいな答えね…」

「ちょっと、それじゃあまるで私が勘だけで生きてるみたいじゃない!?」

「違うの?いつも何か行動を起こすとき「巫女の勘よ!」って言うてる気がするのは私だけ?」

霊夢の反論に紫はきょとんとしたような顔で聞いた

「そんなわけじゃない!」

「おい、もういいかい?」

このままでは收拾がつかないと判断したのか轟識は半ば無理やりに会話を切り、元の話題に戻した

「そうね…で、あなたに頼みたいのは…あの子の世話よ」「フランドール」

紫の一言は部屋にいた人物を全員驚愕させるには十分な一言だった

「……………どういふことが説明してくれるわよね？」

明らかかな怒りの表情でレミリアが紫に視線を向ける

「それには俺も同感だ、引き受ける引き受けない以前に少し前にはあの譲ちゃんに俺が関わることを危惧していたじゃないか…」

轟識もレミリアに続くように質問を口にした

「確かに、吸血鬼が殺人鬼になるのを危惧したわ…でも、あなたの言う零崎ってのは治らないのでしょうか？」

「ああ…前にも言ったと思うが、零崎の殺人衝動は不治の病みたいなものだ、嬢ちゃんはすでに零崎に目覚め、その上、零崎を不完全ながら行ったとなるともう手遅れだな…同じ零崎が言うんだ間違いない」

轟識は紫の問いにただ答えを返した

「一応、あなたにあの子の破壊衝動と殺人衝動を根っこから奪ってもらったのも考えたのだけれども、それをやったらあの子の精神にどんな影響が起きるのかわかったものじゃないし、最悪また暴走なんてされたら面倒だわ……」

紫は心底面倒そうな雰囲気を出しながら、ふう……と溜息をついて言った

「そこで、私はあなたに頼むことにしたのよ。零崎の第一人者というか零崎そのものあなたに」

紫は扇子を轟識に向けてそう言った

完全に他の人たちを無視して話は進んでいく

「で？条件は？」

「ん？」

「だから、お前さんが俺に出す条件だよ。俺にあの嬢ちゃんを任せらうってことは俺があの子の嬢ちゃんを零崎に育てることも口に出してはいないが渋々承諾したってことだ、だが、お前さんが何も考えず俺

にあの嬢ちゃんを零崎として育てさせるなんて考えていないはずだ
…どうせこの後いくつか条件を出すのだろう？」

轟識もベットの从上から紫にそう言った

ただ、両の手を拘束されているので些か恰好はつかないが…

「本当に…話が早くて助かるけど、好きじゃないわ。あなたに良いようにされているみたいよつで」

「そうかい…ま、いいじゃねえか。さつさとさつさと条件を言いな
…よつほど無茶な条件じゃないなら受けよつじゃないか。お前さん
には多少、世話になってるしな」

「じゃあ条件を言つわ、霊夢たちも聞いててね、証人となつてもら
うから」

「いいわ」

霊夢は先ほどの会話を引きずっているのか、若干不機嫌そうな顔で
答えた

「じゃあ、今から条件を言つわよ…」

零

零

零

零

零

「それでその条件ってのは何なんだ？」

時間は戻って現在、魔理沙が轟識の話を一通り聞いた後、そう聞いた

「その時八雲の姉ちゃんが言った条件がここに書いてある。八雲の姉ちゃんが口頭で言った後、十六夜の嬢ちゃんが文章にしたものだ」

ピラッと机の引き出しから轟識は一枚の紙を取り出し机に置いた

魔理沙はソファから立ち上がり、その紙に目を向けた

その紙には箇条書き形式で以下のことが書かれていた………

第16打・八雲紫の要求（後書き）

感想待ってます

第17打・契約書（前書き）

前回のあらすじ

轟識はゆかりんにフランちゃんのお世話を頼まりました

第17打・契約書

～～契約書～～

零崎轟識はフランドール・スカーレットを零崎として教育することを、妖怪の賢者・八雲紫と紅魔館当主・レミリア・スカーレット並びに博麗の巫女・博麗霊夢の名において許可する

ただし、零崎轟識は以下の条約を守る義務が発生する

一つ、二週間から一月の間隔で零崎轟識はフランドール・スカーレットから定期的に『狂気』を能力を用いて生活に支障が出ない域まで『奪う』こと

一つ、フランドール・スカーレットの零崎としての教育は一週間に一度のみである

一つ、フランドール・スカーレットの零崎としての教育は、八雲紫、上白沢慧音、レミリア・スカーレット、博麗霊夢、又はその代理の者の監視の元、行うこと

一つ、零崎轟識は一月ごとに八雲紫、レミリア・スカーレット、博麗霊夢にフランドール・スカーレットの様子を報告すること

一つ、フランドール・スカーレットに人里の人間を無闇に襲わないように教育すること

一つ、フランドールスカーレットに最低限の一般的常識を覚えさせること

一つ、零崎一賊は人里で殺人を犯してはならない

一つ、新たな零崎の存在が確認された場合、八雲紫に最優先で報告すること

以上の項目を破られたと判断された場合、零崎一賊には然るべき処罰を下す

尚、破られたかの是非は八雲紫、博麗霊夢、レミリア・スカーレットが判断を下す事とする

第17打・契約書（後書き）

感想待ってます

第18打・零崎事件（前書き）

前回のあらすじ

契約書：ただそれだけ

第18打・零崎事件

「こづついう感じだ、これで契約は二つ…大変なもんだ。」

轟識は椅子にもたれ掛り、そう言った

ちなみにその契約書はこれのほかに四枚複写され、紫、レミリア、
霊夢、慧音がそれぞれ一枚ずつ持っている

「もうひとつの契約は何なんだ？」

魔理沙は契約書を流すように読んだ後、轟識にそう訪ねた

「もうひとつは上白沢の姉ちゃんと交わした契約だ…『里の人間に
危害を加えない』、『里を襲う妖怪が来た場合はその対応を手伝う』
と簡単な契約だ」

「ふん…」

魔理沙は轟識の言葉に対し、気の抜けたような返事で返した

「ま、俺としてはこの契約より、そこで当然のように飯を食ってる
譲ちゃんの方が悩みの種だな…」

そう言っつて今まで新聞を読んでいた轟識がソファの方へ目を向ける
と…

「おかわり!!」

轟識の方へ茶碗を差し出し、お代りを要求する博麗の巫女の姿があ
った

「博麗の譲ちゃんよ…お前さんは限度つてもんを知らないのか？何
杯食えば気が済むんだ？ああ？」

轟識は苦い顔でそう言った

「そつだよ〜霊夢〜」

フランドールも轟識の後に続くように言った

「いいじゃない。いつものことだしよ？」

シレっと霊夢は言った

「にしては食いすぎなんだよ…今回の異変解決での報酬はどうした？上白沢の姉ちゃんから聞いてるぞ？」

轟識は霊夢が異変解決の際、里の住民から食料を中心とした報酬を受け取っているのを慧音から聞いていた

報酬の割合は食料関係が6割、金銭が3割、その他の物品1割だぞうだ

「確かに貰ったけど、できるだけ節約しないとね…あ、村長の家の前にそれ（報酬）が積んであるから運んでおいてね」

どうやら霊夢は本来、報酬の運搬を剛毅に依頼しに来たらしい…

「わかったよ、後で運んでおく…で、その依頼に対する報酬は？」

「そうね、何かあったら一回だけ助けてあげるわ」

現金や現物で払う気はないらしい…

「そうかい……」

「それよりもおかわり！」

霊夢が茶碗を突き出し再度剛毅におかわりを要求した

剛毅は渋々と茶碗を受け取り台所に引っ込んでいった

これが幻想郷の極一部だけが知っている紅霧異変の後に起きた異変にもならなかった小さな事件…『零崎事件』と呼ばれた事件の全容であった

第18打・零崎事件（後書き）

これにて紅魔郷編は終了となります

感想待っています

第壱打・哀川潤との関係…その1（前書き）

前回のあらすじ

紅魔郷編、終了

第壱打・哀川潤との関係…その1

「ねえ、お兄さん」

「なんだ？フラン嬢ちゃん」

何でも屋『轟』でフランドールに週に一度の零崎の教育を終えた零崎轟識が何時ものように黒塗りの作業机で新聞を読んでいると突然、フランドールが最早定位置と化しつつある轟識の膝の上に座り、轟識に声を掛けてきた

「む〜！どうして、お兄さんは私にも『嬢ちゃん』って付けるの！？」

フランドールは頬を膨らませ轟識に抗議の声を漏らした

轟識はチルノのように名前しかない人物以外は名字でしかも『嬢ちゃん』や『姉ちゃん』、『坊主』や『兄ちゃん』などを付けてでしか呼ばない

それは家賊であるフランドールも例外ではなかった

愛称であるフランと呼んでいるのも『スカーレットの嬢ちゃん』では彼女の姉であるレミリア・スカーレットと呼び方が被ってしまう

…それに、『フレンドールの譲ちゃん』ではないのはフレンドール自身が愛称で呼ばないと嫌だと紅魔館で大泣きしたからだ…

そこでお互いの妥協案として『フラン嬢ちゃん』と呼ぶことになったのだ

それでもフレンドール自身はこうして偶に抗議してくるのだが…

「そんなこと言われてもな…こればかりは昔からのことだからな…」

「でもお…せっかく家賊になったんだから名前で呼んでくれてもいいじゃない…」

「ま、そのうちな…ところで、何か聞きたいことがあったんじゃないか?」

少し困ったような顔をした轟識が話題を変えるべくフレンドールにそう聞いた

「む…話を逸らされた…お兄さんの話にたまに出てくる『人類最強』って人いるじゃない?」

「ああ、それがどうしたんだ?」

「どんなふうに知り合ったの？」

フレンドールの言葉を聞いた轟識は意外な話題を振られたことに驚いた

「あいつと知り合った時のことが……」

「うん、教えてお兄さん」

「ま、言って何かあるわけじゃないし、問題ないか……」

轟識がいざ話を始めようとしたその時……

「剛毅！ 今日も飯集りに来たぜ！」

「魔理沙に同じよ……」

魔理沙と霊夢が店のドアを開け中に入ってきた

「お前さんたち…ここは食堂の類じゃないんだがな…」

「私の中では食堂みたいなもんよ…何の話をしようとしていたのよ？」

「お兄さんの昔話」

轟識は呆れた顔で霊夢に言うが、霊夢はそんなことどこ吹く風と言わんばかりにソファに腰掛ける

魔理沙もソファに腰かけていた

霊夢が轟識にどのような会話をしていたのか聞くとフランドールが代わりに答えた

「へえ、あなたの昔話なんて少し前にその鉄の塊みたいなものごとを聞いた時以来ね」

霊夢は壁に立てかけてあるシームレスバイアスを見てそう言った

「剛毅の昔話か…私も聞かせ！」

魔理沙は戸棚から香霖堂で購入したという自分の湯飲みを取り出し

ながら再び笑顔でソファにドツカリと腰かけた

「まあ、いいか…お茶は自分でいれるよ？」

そう言いながら轟識は語り始めた

零崎轟識と哀川潤…

『抹消欠陥』と『人類最強』…

二人の人間関係の始まりの話を…

第貳打・哀川潤との関係…その2（前書き）

前回のあらすじ

轟識の昔話が始まったよ

第貳打・哀川潤との関係…その2

約五年前：轟識のいる世界では『小さな戦争』と呼ばれる出来事があった時期、零崎轟識は行きつけの喫茶店『ECHO』でいつものようにコーヒーを飲んでいた

コーヒーを持つ反対の手には小さく折り畳まれた新聞を持っていた
この喫茶店は裏の世界とも繋がっているため、轟識はここをアジト代わりに利用することが多かった

その時、喫茶店の扉が開き、一人の男が入ってきた

麦藁帽子を被った青年だ

袖が無い所謂スリーブレスのシャツによれよれでだぶだぶなズボン…両の足にはボロボロのサンダルをはいている

丸いサングラスをかけ、さらに首には白いタオル、肩には野球のバットを入れるような筒のような黒いバック…見た目の印象は

田舎の牧歌的な青年というのがピッタリだろう

彼こそ、零崎一賊の一人…『シームレスハイアス愚神礼賛』の二つ名を持つ殺人鬼…零崎轟識だ

轟識は迷うことなく轟識の座っている席の対面に座った

「相変わらずっっちゃね？レイ」

「お前さんも相変わらずのキャラ作りか？アス」

レイ…零崎轟識もアス…零崎軋識もお互いの顔も見ずにそう呟いた
軋識は店員にコーヒーを頼むといまだに新聞から目を離さない轟識
に対して口を開いた

「この前のこと聞いたっっちゃか？」

「お前さんと人識の坊主が狙撃主に狙われた話か？」

轟識は新聞から目を離さず軋識の問いに間髪入れずに答えた

この時の一週間ほど前に零崎に手を出した者たちの報復に向かった
軋識と人識はその現場で狙撃主^{スナイパー}に狙撃されるという事態に陥ったのだ

「相変わらず情報早いっっちゃね」

「レンから聞いた」

「あいつ……」

軋識は轟識にその時のことを話した『マインドレンデル自殺志願』こと、零崎双識を
思い出し、頂垂れた

「で？俺に何の用だ？」

「近いうちにレンあたりから連絡が来るだろうから連絡を取れるよ
うにしてくれって話だっちゃ」

「なにかあるのか？」

ここで初めて轟識が新聞から目を離し、軋識を見て言った

「俺もまだ、詳しいことは聞いていない、レンが言うには『家賊が
増えるかもしれない』と言っていたっちゃ」

「ほう……」

瞬間、轟識の目が変わった

ギラついた猛禽類のような目だった

「やる気が出た見た見たいっちな？ 『マッドブラザー 兄弟狂愛』 …」

軋識が口に笑みを浮かべてそう言ったとき、轟識は煙草を取り出し火をつけた

「タバコは体に悪いっちなよ？」

「殺人鬼が健康に気を使ってどうすんだ？」

「それもそうっちなね……ところで、当ては見つかったか？」

軋識が聞いた当てとは轟識の武器のことだ

この時点で轟識は『抹消欠陥』と呼ばれてはいたがまだ手甲はないのだ

「で？ 当ては？ 誰だっちな？」

「『呪い名』…『罪口だ』」

「……本気で言ってるっちゃか？」

軋識の目が細くなる

『呪い名』…『殺し名』とは対極に位置する非戦闘集団の総称：

非戦闘集団といっても「殺さない」とは「直接手を下さない」だけに過ぎず、簡単に言うならば『戦わずに相手を殺す』といった感じで『殺し名』のように直接的ではなく間接的に相手を殺す集団なのでそのため、えげつなさでは『殺し名』よりも上である

零崎だけではないが、『暴力の世界』の人間は基本『呪い名』と関わることを嫌悪している

『呪い名』の人物たちが戦力的にも性格的にも異質だからだ

零崎一賊も『呪い名』関わることはない

しかし、今回軋識が武器の製作の候補に挙げたのが『呪い名』の序列第二位…武器の製作を生業としている『罪口商会』だったのだ

「誰に作ってもらうかも決めてるっちゃか？」

「当然だ、罪口積希…弱冠十五という若さで第五地区統括を任されている才女だ…作っている武器のテーマを見てもこいつが適任だと思っっている…」

「……そこまで決めてしまっているならもつ何も言わないっちゃ……
連絡取れるようにしておくっちゃよ？」

「わかった、連絡は取れるようにしておく……それじゃ……」

轟識が伝票を手に取り、レジに向かおうとした時……

「あと、『人類最強』がお前のことを嗅ぎまわってるみたいっちゃ、
気を付けるっちゃ」

「……何？」

轟識の言葉を聞いて歩みが止まった

第貳打・哀川潤との関係：その2（後書き）

この話の時期は『零崎軋識の人間ノック』と『零崎軋識の人間ノック2 竹取山決戦』の間の時期になります

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2524u/>

零崎轟識の幻想殴打

2011年11月20日18時58分発行